

#### ④コウチュウ目

##### 【概要】

埼玉県内ではこれまでに、およそ3,300種類の甲虫が確認されている。近隣地域において調査の進んでいる場所のデータ等から推察するに、実際には4,000種を上まわる甲虫が県内に生息するものと思われる。しかし首都圏に隣接する平野部を中心とした地域では、人為的な開発とそれに伴う自然環境の改変、消失が急速に進み、これらの地域に生息する貴重な種は発見を待たずして県内から絶滅している可能性もある。従って早急な調査と保全対策が重要であり、このため今回のリストには開発等による影響を受けやすいと考えられる水生甲虫や湿地性甲虫を中心に平野部にかつて記録のあるものを大幅に追加した。

埼玉県の甲虫相を地理的に区分すると、秩父山岳地帯に分布の中心を持つ山地性の群と、関東平野の西部地域に分布する平地性の群に大きく二分する事が可能である。しかし、この間に位置する丘陵帯のものも見逃してはならない。

奥秩父の最西部には標高2,500m近くにまで達する三宝山や甲武信ヶ岳がひかえており、亜高山帯の生物相が見られることで貴重な地域であり、国立公園の特別保護区域にも指定されている。この地域は未だ十分な調査が実施されていないのが現状であるが、ヒメクロシテムシやヒメモンシテムシといったシテムシ類など、高標高地に限って生息する若干の種が新たに指定された。山地帯から低山帯にかけてはブナ林等の原生林に生息するツヤハダクワガタや大型のナガクチキ類、あるいは沢沿いの苔が厚く発達した環境に生息するハネカクシ類など、生息環境が限定されるものを中心に新たな追加が行われた。

台地・丘陵帯においてはオオイチモンジシマゲンゴロウなど重要な種の追加情報もたらされたほか、かつては普通に産したウバタマムシやトラフカミキリ、シロスジカミキリなどが種名を連ね、他にもガムシや清流性のゲンゴロウ類など水生甲虫類の種が多く追加された。さらに注目すべきは谷津に生息する種が追加されたことで、コハンミョウモドキやスジグロボタル、キイロジョウカイがこうした種の代表といえる。

県内の半分近くを占める平地帯では、水生、あるいは湿地性甲虫が大半を占め、オオミズスマシやキベリクロヒメゲンゴロウ、ハマベミズギワゴミムシ、オオヒラタトックリゴミムシ、カントウコチビシテムシ、イシハラジョウカイモドキ、ムモンチャイロテントウ、オオルリハムシなど非常に多くの種が追加された。これらの種は一口に湿地や水辺と言っても植生や地表面の湿り具合など微環境の好みにより生息地を限定しているものが多く、わずかな環境の変化でも個体群に与える影響は大きいことから、平野部での水辺環境の保全対策は慎重かつ迅速に行うことが求められる。

④コウチュウ目

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

昆虫類

クモ類

甲殻類

多足類

軟体動物

扁形動物

〔コウチュウ目 ミズスマシ科〕

全県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類

全国カテゴリー -

〔和名〕 オオミズスマシ

〔学名〕 *Dineutus orientalis*

【摘要】かつては全国的にふつうに見られた大型のミズスマシで、止水域に生息する種である。県内ではもともと記録が少なく、現在では極わずかに生存が確認されているにすぎない。

【形態の記載】日本産ミズスマシ類の中では比較的大型の種で、体長7～12mm。体型は幅広く、上翅側縁後方ならびに翅端にはすどく尖る突起がある。前胸背板側縁、上翅側縁は黄褐色に縁取られ、体色は黒色で表面は虹色光沢を有する。

【分布の概要】国内では北海道から琉球列島まで広く分布する。

【生息状況】関東地方の平野部とその周辺では各地で産地が減少しているようである。埼玉県ではもともと生息に関する情報が乏しく、さいたま市（旧浦和市）と秩父市の2ヶ所で記録されているがいずれも1970年代よりも前のもので、これらの産地では現在生息が確認できない。

その後の調査により県東部の江戸川沿いに点在する池沼では現在でも少ないながら産地が確認されているが、他の地域では見つからないことを考えると、県内での生息は危機的な状況であると言える。

【生態的特性】止水域に生息し、昔ながらの水辺環境が保たれている小さな溜池に良く見られる。水面に浮かんだ状態でグルグルと回るようにすばやく移動し、人が近づくとして気配を察すると水中に逃げ込むことが多い。

【生息地の条件】コンクリート護岸等が行われていない溜池など、生息に適した止水域が数多く確保されていること。また生息水域にオオクチバスなどの肉食外来魚が移入されていないこと。

【生存に対する脅威】止水環境の護岸工事等による環境改変。またそれらが進むことで生息に適した環境が地域的に減少すること。肉食外来魚の移入等。

〔コウチュウ目 ミズスマシ科〕

全県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類

全国カテゴリー -

〔和名〕 オナガミズスマシ

〔学名〕 *Orectochilus regimbarti regimbarti*

【摘要】流水性の大型ミズスマシ類で、県内では主に台地・丘陵帯の流水域に生息する。今回の調査で秩父地方から新産地がいくつか見つかったが、依然として限られた分布状況であることには間違いない。

【形態の記載】体長9～10mm。コオナガミズスマシとは体長の差により一見して識別できる。近似種ではツマキレオナガミズスマシやテラニシオナガミズスマシのような稀種が知られているが、上翅側縁がこれら2種は黄褐色であるのに対し本種は黒色であること、本種の早は上翅会合部の先端が突出するなどの点で識別できる。

【分布の概要】本州、四国、九州に分布する。

【生息状況】低地帯の大宮台地から台地・丘陵帯、秩父地方の低山帯まで分布することがわかったが、秩父地方以外の産地では現在、全く確認できない状況であり、嵐山町の都幾川ならびに荒川本流の低地帯における産地はいずれも水辺環境が本種の生息に適した状況でないことから絶滅が危惧される。秩父地方では長瀬岩畳の荒川本流から赤平川、定峰川、橋立川などで複数の産地を確認し

ているが、いずれの産地も地形的条件により本種の好む微環境に限られ、個体数は少ない状況である。

【生態的特性】清流の流水域において岸辺の流れが速い場所に生息し、昼間は水際に生える草本類の葉が水中に垂れ下がる場所に潜んでいて、水面を漂い、また草本にしがみついている。夕方になると活発に活動をはじめ、人の気配がすると水中に逃げる行動がしばしば観察される。夜間は街灯などの明かりにも飛来する。

【生息地の条件】水質の良好な流水域で、流れの速い瀬と水際に草本が垂れ下がる場所が安定的に確保されていること。

【生存に対する脅威】大型機械の使用による河川の改修工事、コンクリートや蛇籠による大規模な護岸、水質汚濁、水流を変化させる周辺域におけるダムや堰の設置等の環境改変。河川敷を利用したレジャーの普及（バーベキュー場、キャンプ場の整備、グラウンド造成等）も影響を与えるものと考えられる。

〔コウチュウ目 ミズスマシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕 コオナガミズスマシ

〔学名〕 *Orectochilus punctipennis*

【摘要】清流の岸辺に生息する小型のミズスマシ類で、オナガミズスマシと同様の生息環境に見られるがより下流域を好み、県下での既知産地は2ヶ所と限られ、北本市の産地ではその後確認できない。

【形態の記載】体長5.5～6.2mmと小型。体型は細長く、体色は黒色で側縁に紋などは無い。

【分布の概要】本州、四国、九州に分布する。

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

④コウチュウ目

昆虫類

クモ類

甲殻類

多足類

軟体動物

扁形動物

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
④コウチュウ目  
昆虫類  
クモ類  
甲殻類  
多足類  
軟体動物  
扁形動物

【生息状況】埼玉県内では低地帯の北本市荒川本流と台地・丘陵帯の嵐山町都幾川より記録されているものの、北本市の産地は今回の調査では現地確認できず、嵐山町の産地でも本種の好む微環境の減少とそれに伴う生息数の減少が目立った。オナガミズスマシに比べるとより下流域に生息するが、いずれの種も産地が限られるため両者の好む環境の違いはあまりはっきりしない。

【生態的特性】オナガミズスマシと同様、清流の流水域において岸辺の流れが速い場所に生息し、昼間は水際に生える草本類の葉が水中に垂れ下がる場所に潜んでいる。夕方になると活発に活動をはじめ、オナガミズスマシのように明かりに飛来した個体を見ることはあまりない。

昼間に水際を網ですくうと、都幾川では一度に数十匹が捕獲されるのが当たり前の状況であったが、現在では環境の変化によりそうした状況はほとんど見られない。

【生息地の条件】水質の良好な流水域で、流れの速い瀬と水際に草本が垂れ下がる場所が安定的に確保されていること。

【生存に対する脅威】大型機械の使用による河川の改修工事、コンクリートや蛇籠による護岸、水質汚濁、水流を変化させる周辺域におけるダムや堰の設置等の環境改変。河川敷を利用したレジャーの普及（バーベキュー場、キャンプ場の整備、グラウンド造成等）も影響を与えるものと考えられる。

【コウチュウ目 コガシラミズムシ科】 **全県カテゴリー** 絶滅危惧Ⅱ類 **全国カテゴリー** 準絶滅危惧  
【和名】マダラコガシラミズムシ 【学名】*Halipplus sharpi*

【摘要】全国的に稀な種で、埼玉県下では低地帯から台地・丘陵帯にかけてわずかな産地が確認されているがいずれの場所でも個体数は極めて少なく、絶滅に瀕しているものと思われる。

【形態の記載】体長3.3~3.8mm、体型は比較的細長く、全身黄褐色で上翅には明瞭な黒色紋を有する。

【分布の概要】国内では北海道から九州まで広く分布する。

【生息状況】埼玉県内では低地帯の北本市と台地・丘陵帯の嵐山町、小川町の2ヶ所の計3ヶ所から記録され、このほか低地帯でもう1ヶ所産地が見つかっている。

【生態的特性】水中に生息し、水を張った水田など、水深の浅い止水域で確認されることが多い。おそらく周辺の水路や河川が本来の生息地と思われ、生態の解明が進めば本来の生息状況が明らかとなるだろう。コガシラミズ

ムシ類は好適な微環境（例えば水草の茂った岸辺の水深が浅い場所、あるいは水田の中でオモダカなどの植物が生えるその根際付近のみ等）に多くの個体がまとまって生息するという状況が各種で観察されることから、本種も同様の状況が予想される。

【生息地の条件】確認されている産地の状況から判断すると、水質の良好な水路と水田、あるいは池沼のような環境が保存されていることが条件として挙げられる。

【生存に対する脅威】現在確認されている生息地の水辺環境とその周辺におけるあらゆる環境改変行為は生存に対する脅威となりうると判断してよい。特に水路の工事や水田における土地改良事業、溜池の修繕などは影響が大きいものと思われる。

【コウチュウ目 コガシラミズムシ科】 **全県カテゴリー** 絶滅危惧Ⅱ類 **全国カテゴリー** -  
【和名】クビボソコガシラミズムシ 【学名】*Halipplus japonicus*

【摘要】県下からは近年の調査で発見された種で、生息環境が特異であることから発見が遅れたものと思われる。産地における個体数は多いが、生息環境の面積はいずれも狭い範囲に限定されることから、周辺環境も含め大規模な護岸や改修等で容易に絶滅する可能性がある。

【形態の記載】体型は比較的細長く、体色は淡黄褐色で上翅には不明瞭な黒色紋を生じるが、個体変異があり、紋が発達して上翅中央付近が黒ずむ個体から紋がほとんど発達せず条線の点刻部のみとなるものまで見られる。良く似たカミヤコガシラミズムシとは形態的に区別するのはたいへん難しいようであるが、斑紋変異のパターンは明らかに異なる。

【分布の概要】北海道から九州まで広く分布する。

【生息状況】県内では低地帯の妻沼低地に属する利根川流

域と、台地・丘陵帯の西端にあたる長瀬の荒川流域、ならびに秩父山地の低山帯に属する荒川の支流より産地が確認されている。

【生態的特性】水中で生活し、河川の伏流水が河床から湧き出す場所で、水草類が豊富な微環境に見られる。また夜間の街灯など明かりにも飛来する。生息地では個体数も多く、環境さえあればその地域では多産するようであるが、生息環境自体が特殊であるため産地が限られる。

【生息地の条件】河川の伏流水が河床から湧き出す場所で、水草類が豊富な環境が保たれていること。

【生存に対する脅威】河川改修に伴う岸辺の護岸、埋め立て。水質汚濁。伏流水が止まってしまうような周辺水域における環境改変。台風などによる大水で水中の植生が流されてしまうことも脅威といえる。

〔コウチュウ目 コガシラミズムシ科〕

【全県カテゴリー】 情報不足

【全国カテゴリー】 -

〔和名〕 ヒメコガシラミズムシ

〔学名〕 *Haliplus ovalis*

【摘要】 やや大型のコガシラミズムシで、関東の平野部から得られた個体を基に記載された種である。保育社の原色日本甲虫図鑑の解説中には「ふつう」とあるが、神奈川県では原記載以後記録が無く、東京都も同様と思われる。栃木県や茨城県、千葉県では記録が無く、埼玉でも詳細不明のわずかな記録があるのみ。少なくとも関東の平野部では生息状況が判らないほどに記録の少ない状態の種である。

【形態の記載】 外見はクビソコガシラミズムシの斑紋が発達した個体に良く似ているが、体長4.0~4.3mmとやや大型で、前胸背板基部両側に短い縦条が存在しないこと、また後脚脛節内側には剛毛列があること (*Liaphlus* 亜属の

特徴) により明確に識別できる。

【分布の概要】 国内では北海道から九州まで分布する。

【生息状況】 さいたま市の2ヶ所(旧浦和市、大宮市)と日高市(詳細不明)の3例が知られるが、いずれも詳細のわからない記録であり、生息状況は不明。今後の分布調査が重要である。

【生態的特性】 水中に生息する仲間である。産地が平野部に限られているようであるが、詳しい生態は不明である。

【生息地の条件】 平地の水辺環境が良好な状態で保たれていること。

【生存に対する脅威】 平地の水辺環境の改変行為。

〔コウチュウ目 ゲンゴロウ科〕

【全県カテゴリー】 準絶滅危惧

【全国カテゴリー】 -

〔和名〕 ヒメシマチビゲンゴロウ

〔学名〕 *Nebriporus nipponicus*

【摘要】 本州、四国に分布する。清流とその周辺部に生息する。本種は分類学的には九州南部に分布するコシマチビゲンゴロウのシノニムとして扱われていたが、現在は形態の違い等により独立種とされている。

【形態の記載】 体型は卵形で、体表の光沢はやや強く、体色は淡黄褐色、前胸背板中央付近と上翅に黒色の紋を有する。腹面は黒褐色。チャイロシマチビゲンゴロウとは体色や斑紋の違いにより識別できるが、♂交尾器ならびに♂前脚ふ節の爪の形状が重要な識別点となる。

【分布の概要】 本州、四国に分布し、清流域に生息する。

【生息状況】 埼玉県内では台地・丘陵帯から低山帯にかけて確認されており、産地では個体数が多い場所もある。

【生態的特性】 清流とその周辺の水溜りに生息するようで、長瀬岩畳では、水溜りに多くの個体が見られ、また夜間の灯火採集でも頻繁に飛来が確認された。

【生息地の条件】 清流やその周辺の水溜りで、底に小石がたまったような場所を好む。こうした環境が安定的に確保されていることが条件となる。

【生存に対する脅威】 水辺環境を著しく改変するような、大型機械を用いた改修工事や護岸、また水質の悪化も生存に対する脅威となる。河川敷を利用したレジャーの普及(バーベキュー場、キャンプ場の整備、グラウンド造成等)も大きな影響を与える。

【特記事項】 阿部(1990)がコシマチビゲンゴロウとして嵐山町都幾川(菅谷)から記録したもの、また大熊(1990)が北本市より、大熊・黒澤(1995)が小鹿野町よりシマチビゲンゴロウとしてそれぞれ記録したものは本種と思われるが、標本を確認していないため本種の分布には含めていない。北本市の記録が本種であれば、県下では低地帯でも分布していることとなる。

〔コウチュウ目 ゲンゴロウ科〕

【全県カテゴリー】 準絶滅危惧

【全国カテゴリー】 -

〔和名〕 チャイロシマチビゲンゴロウ

〔学名〕 *Nebriporus anchoralis*

【摘要】 溪流性の種で、県内での産地は秩父地方に限定される。中流域の清流には近縁のヒメシマチビゲンゴロウが生息しており、本種はこれより上流域に分布するものと考えられるが、これを確認するには生息調査をさらに進める必要がある。

【形態の記載】 体型は卵形で、体表面の光沢は鈍く、体色は黄赤褐色。前胸背板前縁ならびに基部中央付近と上翅には黒色紋があり、上翅の紋はヒメシマチビゲンゴロウに比べるとかなり発達する。腹面は暗赤褐色。

【分布の概要】 北海道と本州の中部以北に分布する種で、清流から溪流域にかけて生息する。

【生息状況】 埼玉県内では現在のところ秩父市浦山川上流の1ヶ所のみ産地が確認されている。

【生態的特性】 清流から溪流にかけて生息する種で、溪流の岸辺などでは発見も容易なようである。浦山川では溪流に面した林道沿いにある小さな池(湧水を引き入れたもの)内で泳いでいる個体が確認されたが、本来の生息地は河川であると思われる。

【生息地の条件】 清流から溪流にかけて止水域が確保されるような環境があり、なおかつ水質が良好であること。

【生存に対する脅威】 水質悪化、流れにおける河床をさらうような河川工事等。

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

④ コウチュウ目 昆虫類

クモ類

甲殻類

多足類

軟体動物

扁形動物



哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
④コウチュウ目  
昆虫類  
クモ類  
甲殻類  
多足類  
軟体動物  
扁形動物

[コウチュウ目 ゲンゴロウ科] **全県カテゴリ** 準絶滅危惧 **全国カテゴリ** -

[和名] ゴマダラチビゲンゴロウ [学名] *Neonectes natrix*

**【摘要】** 黒色地に淡黄褐色の水玉模様がかわいらしいゲンゴロウ。清流性の種で、県内での記録は秩父以外では多くなく、主にせせらぎのある自然河床に生息が確認されている。生息範囲は河川内でも一部の微環境に限られることから、護岸や河川改修工事による環境の変化で容易に絶滅する危険性がある。

**【形態の記載】** 体型は卵形で、体色は黒色。頭部中央、前胸背板中央、ならびに上翅には淡黄褐色の紋を有し、特に上翅の紋は特徴的で他に見まがうことはない。

**【分布の概要】** 北海道、本州、四国に分布する。

**【生息状況】** 埼玉県内では低地帯の大宮台地から山地帯まで幅広く分布するがいずれの産地も局所的である。北本市の産地2ヶ所では現地調査でいずれも確認できなかった。また秩父の小鹿野町以外にも日高市の高麗川や秩父市の

赤平川などで産地を確認しており、局所的ではあるが他にも未発見の産地があるものと思われる。

**【生態的特性】** 清流に生息し、河床に石の多い場所であまり深くない場所に多い。産地における生息場所は局所的で、同じ流れの中でも本種が見られる場所とそうでない場所があり、生息場所では個体数も少なくは無い。

**【生息地の条件】** 水質の良好な、護岸の進んでいない清流があること。流れが遅く、水中に藻が生じるような場所では生息しないことから、流水の状況が重要と思われる。

**【生存に対する脅威】** 水質悪化、流れにおける河床をさらうような河川工事、護岸等。河川敷を利用したレジャーの普及（バーベキュー場、キャンプ場の整備、グラウンド造成等）も影響を与えるものと考えられる。

[コウチュウ目 ゲンゴロウ科] **全県カテゴリ** 絶滅危惧 I B類 **全国カテゴリ** 準絶滅危惧

[和名] トダセスジゲンゴロウ [学名] *Copelatus nakamurai*

**【摘要】** 本州の低湿地で限られた地域にのみ生息する小型のゲンゴロウ。和名は後にシノニムとされた *C. hasegawai* の原記載時に基準産地とされた埼玉県戸田市の地名による。江戸川流域で新たな産地が見つかったが、依然として生息が危惧される状況である。

**【形態の記載】** 体長3.9~4.6mmと小型で、体型は細長く、黄褐色地に黒の縦縞が入る美麗種で他の種とは一見して識別できる。

**【分布の概要】** 本州の北関東周辺と愛知県から記録されているが局所的な分布である。

**【生息状況】** 埼玉県内では低地帯の荒川や江戸川の河川周

辺にある湿地環境からのみ見つかっている。

**【生態的特性】** 湧水のある水溜りが本来の生息地であると思われ、湿地植生の残るこうした場所の水底もしくは土中より見出される。特に湧水の湧き出し口では多くの個体が見られる。活動期には夜間の外灯にも飛来する。

**【生息地の条件】** 水質の安定した湿原、もしくは河川の伏流水が湧き出す水溜りが周囲の植生とともにある程度確保されていること。

**【生存に対する脅威】** 水質悪化、湧水の消滅等乾燥化。また埋め立て等による環境そのものの消失。生息環境の範囲が小さい場合、採集圧も重大な脅威となる。

[コウチュウ目 ゲンゴロウ科] **全県カテゴリ** 情報不足 **全国カテゴリ** -

[和名] テラニシセスジゲンゴロウ [学名] *Copelatus teranishii*

**【摘要】** 荒川河川敷の田島ヶ原から50年近く前の古い記録が1例あるのみで、近似種との同定の難しさや全国的な分布状況から見ても同定に疑問の残る種である。再発見が望まれる。

**【形態の記載】** 体長4.8~5.5mm。全身黒色で上翅基部に黄褐色部がある。関西地方に分布するカムリセスジゲゴロウ *C. kammuriensis* に外見が極めてよく似ている。また色彩的にはセスジゲンゴロウ *C. japonicus* も良く似ており、これらは事実上♂交尾器による同定以外に識別が難しいことから、古い記録の中には再検を要するものが含まれ

ている。

**【分布の概要】** 本州と九州、対馬に分布する。

**【生息状況】** さいたま市（旧浦和市）の田島ヶ原から古い記録が1例あるのみ。森・北山（2001）の各県記録でも近隣では全く知られておらず、最も近いのが福島県である。

**【生態的特性】** 日陰の水溜りや池に生育するヨシ原などから得られている。

**【生息地の条件】** 止水域の水辺環境が生息地のようであるが詳細不明。

**【生存に対する脅威】** 生息地における環境改変。

〔コウチュウ目 ゲンゴロウ科〕

全県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類

全国カテゴリー -

〔和名〕 クロズマメゲンゴロウ

〔学名〕 *Agabus conspicuus*

【摘要】主に止水域に生息する中型のゲンゴロウ。県内で現在確認できる産地は秩父市の1ヶ所のみ。産地の池は植生の遷移が進んでおり、湿地に樹木が生えはじめている。周囲に止水域が全くないことから、今後の生息が危ぶまれる。

【形態の記載】体長は9.5~11.5mm、体型は楕円形で厚みがあり、表面の光沢はやや鈍い。黒色で上翅肩部や先端部がやや淡色となる。

【分布の概要】国内では北海道から九州まで広く分布する。

【生息状況】県内での既知産地は3ヶ所で、低地帯のさいたま市（旧浦和市）と鴻巣市の産地では現在生息が確認できず、絶滅した可能性もある。秩父市の生息地では発生状況に変動があるものの現在でも多くの個体が確認で

きる。しかしながら産地が極端に狭く、周囲に止水域が全く無いことから、植生の遷移や埋め立て等により容易に絶滅するであろう。

【生態的特性】止水域に生息し、水深の浅い池で水底の泥を掬うとたくさんの個体が確認できることから、そうした環境を好んで生息するようである。

【生息地の条件】発生地とその周辺の止水域が安定的に確保されていること。またそうした水域の水辺が護岸等されていないこと。

【生存に対する脅威】埋め立て、植生の遷移等による水域の消滅。水源となる場所の変化による水量の減少、過度な乱獲など。

〔コウチュウ目 ゲンゴロウ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕 キベリクロヒメゲンゴロウ

〔学名〕 *Ilybius apicalis*

【摘要】低地の池沼に生息するゲンゴロウ。県内では平野部の2ヶ所でのみ記録され、北本の産地ではヒシの覆う池沼でその後も得られている。しかしながら他に生息地は多くないことが予想される。

【形態の記載】体長8~10mm、形態は楕円形でやや細長く、体色は黒色でやや金銅光沢を帯び、前胸背板ならびに上翅側縁から翅端にかけては黄褐色である。

【分布の概要】国内では北海道から南西諸島のトカラ列島まで広く分布。

【生息状況】県内では低地帯の2ヶ所でのみ記録され、北本市の産地ではヒシの覆う池沼でその後も採集されている。

既知産地は安定した生息地ではあるが、他に同様の環境は多くないことが予想されることから、決して生息安泰とはいえない。

【生態的特性】浮遊植物が水面を被い、水深の深い沼などの止水域に生息し、夜間の灯火にも飛来する。

【生息地の条件】ヒシなどの浮遊植物や水辺の植生が保たれた止水域が広範囲にわたり確保されていること。水域にオオクチバスなどの肉食外来魚が移入されていないこと。

【生存に対する脅威】水域の護岸や埋め立て等による環境の変化。水質の悪化、肉食外来魚の移入等。

〔コウチュウ目 ゲンゴロウ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕 シマゲンゴロウ

〔学名〕 *Hydaticus bowringi*

【摘要】上翅の両側縁に2本ずつの黄帯がある特徴的なゲンゴロウ。県内での記録は多いがいずれも古いものばかりで、最近の記録は比企地域や秩父地方に限られている。平野部では絶滅したか、それに近い状態であることが予想される。

【形態の記載】中型のゲンゴロウで体長は12.5~14mm、体型は卵形で厚みが強く、体色は黒色で光沢が強い。頭部前縁、前胸背板側縁から中央部にかけてと上翅の縁、基部にそれぞれ淡黄褐色の紋があり、特徴的である。

【分布の概要】国内では北海道から南西諸島（トカラ列島）まで広く分布。

【生息状況】県内では低地帯から低山帯まで広く分布していたようで、古い記録は多い。近年は生息地が減少して

おり、台地・丘陵帯から低山帯にかけてわずかに残るのみである。

【生態的特性】田んぼや池沼といった止水域を好み、灯火にも飛来する。生息地では稲刈りが終わった後の水田に残る小さな水溜りなどで確認される。

【生息地の条件】水質の良好な止水域（田んぼや池沼）が安定的に存在し、周囲で農薬の使用がほとんどないこと。水域にオオクチバスなどの肉食外来魚が移入されていないこと。

【生存に対する脅威】水質悪化、農薬の使用、池沼への肉食外来魚の移入、農地整備等に伴う水辺の護岸や水路の構造変更も影響を与えると考えられる。

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

④コウチュウ目 昆虫類

クモ類

甲殻類

多足類

軟体動物

扁形動物

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
④コウチュウ目  
昆虫類  
クモ類  
甲殻類  
多足類  
軟体動物  
扁形動物

〔コウチュウ目 ゲンゴロウ科〕 **全県カテゴリー** 絶滅危惧Ⅱ類 **全国カテゴリー** 絶滅危惧Ⅰ類  
〔和名〕オオイチモンジシマゲンゴロウ (ホンシュウオオイチモンジシマゲンゴロウ) 〔学名〕 *Hydaticus conspersus conspersus*

【摘要】湿地や湧水の水溜り、細い流れなどに生息する中型のゲンゴロウ。県内では荒川や槻川流域で新産地が確認されているが、県内全域での生息状況は依然として変わらない。  
【形態の記載】体長16～18mm程度、色彩は黒色で頭部と前胸背板は黄褐色で一部に黒色紋がある。上翅肩部に黄褐色の一文字模様があり特徴的である。  
【分布の概要】本州の東北から関東、関西の一部にかけて分布。  
【生息状況】低地帯の大宮台地では北本市の産地が有名であり、最近では近隣の地域でも確認されている。また、東松山市の都幾川沿いにあった産地は埋め立てにより消

滅したが、その上流域である嵐山町から新たな産地が見つかった。  
【生態的特性】湧水起源の水がきれいな小川や谷津田の用水、あるいはその周囲の湿地などに生息し、水底の落ち葉などの隙間に潜んでいる。時には多くの個体が一ヶ所から確認されることもあり、条件さえ整えば多く発生する種のようなものである。  
【生息地の条件】水質の良好な水域が周囲の環境とともに保存されていること。  
【生存に対する脅威】水質悪化、農薬等の影響も重要な脅威である。また水域そのものに対する物理的な改変も生息に影響を与える。さらに過度の採集圧も脅威となろう。

〔コウチュウ目 ゲンゴロウ科〕 **全県カテゴリー** 絶滅危惧ⅠA類 **全国カテゴリー** 準絶滅危惧  
〔和名〕マルガタゲンゴロウ 〔学名〕 *Graphoderus adamsii*

【摘要】かつては日本各地で普通に見られた中型のゲンゴロウ。県内ではいくつかの記録があるがいずれも古いものばかりで、最近の記録が一切無い。関東一円の生息状況を考えると、絶滅したかそれに近い状況と思われる。  
【形態の記載】体長12～14.5mmと中型のゲンゴロウで、体型は卵形でかなり丸く、色彩は頭部、前胸背板は黄褐色で黒色紋を有し、上翅は黒色に黄褐色の細かい斑模様を被い縁は黄褐色。  
【分布の概要】国内では北海道から九州まで分布。全国的に減少しており、各地のレッドデータに種名が挙がっている。  
【生息状況】県内では低地帯から台地・丘陵帯にかけて記

録があるものの、近年の確認例はまったくない。関東地方での生息状況を考えると、絶滅したかそれに近い状況であることが予想される。  
【生態的特性】水田や池沼といった止水域に生息する。  
【生息地の条件】農薬等の影響を受けない水田、池沼が残っていること。またその水域における水質が良好な状態で保たれていること。水域にオオクチバスなどの肉食外来魚が移入されていないこと。  
【生存に対する脅威】水質悪化、農薬類の使用、肉食外来魚の移入、農地整備等に伴う水辺の護岸や水路の構造改変も影響を与えられよう。過度の採集圧も重要な脅威となろう。

〔コウチュウ目 ゲンゴロウ科〕 **全県カテゴリー** 絶滅危惧ⅠA類 **全国カテゴリー** -  
〔和名〕クロゲンゴロウ 〔学名〕 *Cybister brevis*

【摘要】やや大きめの中型ゲンゴロウの種で、県内では秩父地方のみで古い記録が散見される。近年まで生息の情報があった産地もあるが、現在はいずれの産地でも確認できない状況である。  
【形態の記載】体長20～25mmと中型のゲンゴロウで、色彩は全体が緑褐色味を帯びた黒色、上翅端と脚部に黄褐色の部分がある。  
【分布の概要】国内では本州、四国、九州に分布。  
【生息状況】県内では秩父地方の低山帯にのみ分布しており、秩父市や横瀬町の池などで記録があるがいずれも古

い記録のみで、最近の記録は無い。  
【生態的特性】水田周辺や池沼の主に止水域に生息するが局所的である。  
【生息地の条件】水質が良好で水生植物が生育するような止水域が保たれていること。農薬の影響が及んでいない水田環境が保存されていること。水域にオオクチバスなどの肉食外来魚が移入されていないこと。  
【生存に対する脅威】水質悪化、農薬の使用、乾田化、池沼への肉食外来魚の移入。過度の採集圧等。

〔コウチュウ目 ゲンゴロウ科〕

【全県カテゴリ】 絶滅危惧Ⅰ類

【全国カテゴリ】 絶滅危惧Ⅰ類

〔和名〕 コガタノゲンゴロウ

〔学名〕 *Cybister tripunctatus orientalis*

【摘要】 かつては全国的に普通に見られたゲンゴロウで、昭和期に行われた農薬の大量使用やその後の水質汚濁等の影響で全国的に絶滅が危惧される種である。県内では最近の記録が全く無い。

【形態の記載】 体長24～29mmほどに達する大型ゲンゴロウで、背面は緑褐色の強い光沢を帯びた黒色、体側縁には黄褐色帯がある。体下面は暗赤褐色～黒褐色で腹部に黄褐色の紋を生じる個体もある。

【分布の概要】 国内では本州から南西諸島、また小笠原諸島にも分布する。

【生息状況】 かつては県内でも広く生息したようで、低地帯から低山帯にかけて記録が散見される。大宮台地とその周辺の産地はいずれも環境が悪化し、低地帯ですでに絶滅したものと思われる。秩父地方の産地ではさほど

環境に変化は無いことから生息する可能性もあるが、農薬使用や水辺の改修工事の影響がどれほどのものかわからない。いずれにせよ近年の記録は全く無いので、再発見が望まれる。

【生態的特性】 水生植物の繁茂する池沼や水田、あるいは河川の水辺などに生息し、かつてはどこにでも見られた種である。灯火にも飛来する。

【生息地の条件】 水生植物の繁茂する、水質の良好な止水域が安定的に確保されていること。水域にオオクチバスなどの肉食外来魚が移入されていないこと。

【生存に対する脅威】 水質悪化、農薬の使用、乾田化、池沼への肉食外来魚の移入、河川の水辺護岸等。過度の採集圧も重要な脅威となろう。

〔コウチュウ目 ゲンゴロウ科〕

【全県カテゴリ】 絶滅危惧ⅠA類

【全国カテゴリ】 準絶滅危惧

〔和名〕 ゲンゴロウ

〔学名〕 *Cybister japonicus*

【摘要】 わが国に産する最も大型のゲンゴロウ。全国的に減少しており、県内でも平地帯では絶滅したものと思われる。

【形態の記載】 体長34～42mmと日本産ゲンゴロウ最大級の大型種で、背面は緑褐色帯びた黒色で♂は強い光沢があるが、♀には細かい縦皺があるため光沢が鈍い。体側縁には黄褐色帯があり、腹面も黄褐色で部分的に黒色である。

【分布の概要】 国内では北海道から九州まで分布。

【生息状況】 県内では低地帯から低山帯まで分布していたようであるが、農薬等の影響で激減し、低地帯では生息環境が極めて悪化しており近年の記録がないことから絶滅したものと考えられる。秩父地方では既知産地全てで確認できない状況で、最後まで生息が確認されていた産地も現在では絶滅したようである。しかしながら本種と

思われる個体の採集・観察例がまだあり、未確認ではあるが現在でも細々と生息しているものと思われる。発生地の確認と確実な保全対策が必要と思われる。

【生態的特性】 ヒルムシロやオモダカといった水生植物の生育する池沼や水田などに生息し、かつては普通に見られた種である。灯火にも飛来する。産卵は水生植物の茎内に行われ、蛹化は水辺の土中にて行われる。

【生息地の条件】 水生植物の繁茂する、水質良好で農薬等の影響を受けない止水域が確保されていること。また水辺がコンクリート等で護岸されていないこと。水域にオオクチバスなどの肉食外来魚が移入されていないこと。

【生存に対する脅威】 水質悪化、農薬の使用、乾田化、水生植物の減少、池沼への肉食外来魚の移入、河川の水辺護岸等。大型種で個体数も限られることから採集圧は重要な脅威となる。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕

【全県カテゴリ】 準絶滅危惧

【全国カテゴリ】 準絶滅危惧

〔和名〕 フタモンマルクビゴミムシ

〔学名〕 *Nabria pulcherrima pulcherrima*

【摘要】 礫の河原に生息するマルクビゴミムシの一種。全国的に産地が限られ、県内では古い記録が散見されるものの最近の記録は利根川のもので唯一である。河原への車両の乗り入れや大型重機による河原の作業などが影響して産地が減少している。

【形態の記載】 体長11～12.5mm、体は縦長で平たく、前胸背板は心臓型、上翅は肩があり、やや幅広くて側縁は丸みを帯びる。脚と触覚は細長く、良く似たカワチマル

クビゴミムシとはこれらの状態や小顎髭の形態により識別できる。脚色彩は全身黄赤褐色で、上翅中央よりやや後方に黒色紋を生じ、個体によっては上翅のほとんどが黒色となる。外見の良く似たカワチマルクビゴミムシやキベリマルクビゴミムシは頭部と前胸背板に黒色部があるが、本種では黒色部を生じることはない。

【分布の概要】 国内では本州から九州までの河原環境とその周辺に分布する。

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

④コウチュウ目

昆虫類

クモ類

甲殻類

多足類

軟体動物

扁形動物

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
④コウチュウ目  
昆虫類  
クモ類  
甲殻類  
多足類  
軟体動物  
扁形動物

【生息状況】 県内では低地帯から低山帯まで分布していたようであるが、記録の中にはカワチマルクビゴミムシ等の誤同定がかなりの割合で含まれている模様で、正確な分布状況ははっきりしない。いずれも古い記録が多く、最近の記録は利根川流域のものが唯一である。多くの産地でその後環境が悪化し、生息が確認できなくなっている。  
【生態的特性】 礫の多い河原に生息し、水際の礫中や大きな石下から見つかる。水中に藻が生育するような場所に

は見られず、流れの速く礫が厚く堆積している場所を好むようである。  
【生息地の条件】 水際に礫が厚く堆積する場所が広範囲にわたって確保されていること。そうした環境に乗用車や大型重機の乗り入れが一切ないこと。  
【生存に対する脅威】 生息地における乗用車や大型重機の乗り入れによる水際の押圧、水質悪化に伴う藻の発生や水量減少なども生息に影響すると考えられる。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕 **全県カテゴリー** 準絶滅危惧 **全国カテゴリー** 準絶滅危惧  
〔和名〕 **キベリマルクビゴミムシ** 〔学名〕 *Nebria livida angulata*

【摘要】 河原周辺に生息するマルクビゴミムシ類。全国的に産地が減少しているようで、近年の採集例はあまり多くない。県内では近年の記録が一切無く、既知産地における調査でも確認できない。  
【形態の記載】 体長13~16.5mmとやや大きく、体は縦長で平たく、前胸背板は心臟型、上翅は肩があり、やや幅広くて側縁は直線状の部分がある。また上翅第3間室に剛毛孔点があるので近似の種とは容易に識別できる。色彩は赤褐色で、頭部は黒色で背面に一對の赤色紋がある。前胸背板基部と上翅中央部は黒色。  
【分布の概要】 国内では北海道から九州まで分布。

【生息状況】 低地帯から台地・丘陵帯にかけて古い記録が散見されるが近年の記録が全くない。生息環境の変化が著しい産地については特に絶滅が危惧される。  
【生態的特性】 河原とその周辺の畑地や草地に生息するようである。  
【生息地の条件】 河原や周辺の草地・畑地環境が保たれ、急激な環境変化にさらされていないこと。  
【生存に対する脅威】 河川敷への乗用車の乗り入れ、畑地での農薬の使用、乾燥化、外来植物の繁茂などが生息に影響すると思われる。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕 **全県カテゴリー** 絶滅 **全国カテゴリー** -  
〔和名〕 **アイヌハンミョウ** 〔学名〕 *Cicindera gemmata aino*

【摘要】 河川の上流~中流域で川幅が狭い河原に生息するハンミョウ。全国的に産地が減少傾向にあり、県内では既知産地も含め全く確認できないことから絶滅したものである。  
【形態の記載】 体長16~17mmと大型のハンミョウで、色彩は灰緑色がかった黒色で上翅に乳白色の斑紋を生じる。一見ミヤマハンミョウやニワハンミョウ、コニワハンミョウに似るが、前胸背板は白色剛毛に覆われ、♂は大顎の先端が大きく縦に広がるという顕著な特徴を有する。  
【分布の概要】 北海道から九州、対馬まで分布。  
【生息状況】 県内では低山帯で神川町からのみの記録となる。この産地はキャンプ場への造成が行われた際に河川敷を大幅に改修したため、現在では生息に不向きな公園状態となっており、絶滅したものである。低地帯（さいたま市）と山地帯（秩父市）の記録は環境から考えて

それぞれニワハンミョウかコニワハンミョウ、ミヤマハンミョウの誤同定と思われることから、記録としては含めていない。  
【生態的特性】 河川の上、中流域に生息し、川幅が狭く流路が蛇行するような場所に良く見られる。幼虫はかろうじて水没を免れる場所に営巣し、成虫も周辺で活動する。天気が良いときにのみ活動し、日光が陰ると石の下などに潜り込んで動かなくなる。捕食性。  
【生息地の条件】 幼虫の営巣に適した砂混じりで植生が疎な河原があり、この場所が水没せず、また乗用車等の乗り入れが一切ないこと。  
【生存に対する脅威】 河川改修工事に伴う護岸、大型重機や乗用車等の乗り入れ、レジャー目的の利用、生息地の水没など。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕 **全県カテゴリー** 絶滅危惧 I A類 **全国カテゴリー** 絶滅危惧 II類  
〔和名〕 **カワラハンミョウ** 〔学名〕 *Cicindera laetescrpta*

【摘要】 砂丘や河原の砂地に特異的に生息する大型のハンミョウ。河川改修やデイキャンプ、バーベキュー場等レジャーの普及による影響で全国的に産地が減少している。県内では近年の確実な記録がない。

【形態の記載】 体長14~17mmと大型の種で、上翅は黒色に乳白色の紋を生じ、白色の割合が多い個体も良く見られる。砂地が暗い色の場所では黒色が強い。前胸背板は剛毛に覆われ、脚は非常に長い。



【分布の概要】国内では北海道から九州まで分布。

【生息状況】県内では低地帯から山地帯まで広く分布し、各地の河原で見られたようである。特に荒川と高麗川流域には記録も多い。これらの産地のほとんどは観光開発や河川改修によってほぼ消滅し、壊滅的である。現在確実な産地がひとつもないことから、早急な再発見が望まれる。

【生態的特性】成虫は真夏に発生し、砂丘など広い砂地環境で活動する。長距離飛翔を行い、他の生物を捕食する。幼虫も同様の環境に営巣し、水没しない場所に多くの巣が見られる。

【生息地の条件】広い砂地、水没しない場所が確保され、餌となる昆虫等が多く、こうした場所に大勢の人や乗用車、大型重機等が一切入り込まないこと。

【生存に対する脅威】生息地である砂地への大勢の人や乗用車、オフロードバイク、大型重機等の進入による踏圧。改修工事等。

【特記事項】最近の唯一の記録として東松山市大岡のものがあるが、この記録が掲載された報告には昆虫類で明らかな誤同定がいくつかあり、本種についても標本を確認できないことから記録には含めないでおく。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー 準絶滅危惧

〔和名〕ホソハンミョウ

〔学名〕*Cylindera gracilis*

【摘要】地上をすばやく走り飛ばないハンミョウ。県内では平野から丘陵地に記録が散見される程度で、平野部では河川沿いのヨシ原といった産地が危険にさらされている可能性が高い。

【形態の記載】体長10～12mmの中型のハンミョウで、体型は細く、色彩は黒色で艶が無く、上翅の側縁には乳白色の紋が2対ある。また個体によっては上翅会合部後方に赤色紋を生ずるものがある。肩が狭く、飛翔能力を欠くものと考えられる。

【分布の概要】国内では本州、四国、九州に分布。関東では栃木県の渡良瀬遊水地一帯が本種の良い生息地となっており、多くの個体が観察できる。

【生息状況】県内では低地帯から低山帯にかけて分布し、特に低地帯での記録が多い。最近でも記録があるが決して産地は多くない。

【生態的特性】森林の林床や河川沿いの草地に生息し、地上をすばやく走る。河川沿いの芦原にできた道などでは草地から走り出てくる個体が観察される。

【生息地の条件】水辺や森林の林床のように湿度の高い場所を好むため、そうした場所で植生が広範囲で確保されていること。

【生存に対する脅威】河川改修に伴う生息地の大型重機等による踏圧、森林伐採、乾燥化等。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕

全県カテゴリー 絶滅危惧 I A類

全国カテゴリー -

〔和名〕アカガネオサムシ

〔学名〕*Carabus granulatus telluris*

【摘要】東日本の低湿地に生息するオサムシ。関東では栃木県の渡良瀬遊水地が有名な産地であるが、近年は乾燥化に伴い生息数が減少しつつあるようだ。県内の確実な産地であった見沼での最近の記録が無くなり、県東部のほかの地域からも最近の記録が無いことから、より絶滅の危険度が増しているものと思われる。

【形態の記載】体長20～25mmと県内に生息する湿地性歩行虫類のなかでは最大の種で、色彩は鉄色の光沢を帯びた黒色、上翅には特有の彫刻がある。

【分布の概要】本州の東日本にのみ分布。太平洋側では神奈川県まで分布していたようであるが、現在は千葉県北部あたりが南限と考えられる。北海道には別亜種が分布する。

【生息状況】県内では低地帯の大宮台地と中川・加須低地でのみ記録があり、生息地はいずれも開発と隣り合わせの場所であり、それぞれの産地同士は分断化されている。

【生態的特性】低湿地で周囲に森林があり地上に水が溜まるような環境に生息し、夜間に活動する。多くの個体は後翅が消失し、従って飛翔能力を欠く。越冬は成虫で行い、朽木や土中において行われる。

【生息地の条件】良好な湿地環境と周囲の森林が広範囲に渡り保たれていること。

【生存に対する脅威】湿地の埋め立て、周辺環境の開発。外来植物の進入や水路の改修等に伴う湿地の乾燥化も大きな脅威となる。

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
④コウチュウ目  
昆虫類  
クモ類  
甲殻類  
多足類  
軟体動物  
扁形動物

〔コウチュウ目 オサムシ科〕 **全県カテゴリー** 絶滅のおそれのある地域個体群 **全国カテゴリー** -

〔和名〕 **ホソアカガネオサムシ** 〔学名〕 *Carabus vanvolxemi vanvolxemi*

【摘要】 秩父では山岳地帯の高所にのみ分布する大型のオサムシで、原生林などの林床に生息する。一部の産地では乾燥化や植林によりすでに生息が確認できない状況であり、生息地の減少が危惧される。

【形態の記載】 体長19～26mmと大型のオサムシ。黒色で全体に鈍い金属光沢を有する。

【分布の概要】 本州の一部の山岳地帯にのみ生息するオサムシで、日光などでは多産する。

【生息状況】 県内では秩父地方の標高1,000m以上の山地帯から亜高山帯にかけて生息する。過去に記録のある小鹿野町の志賀坂峠ではその後確認できず、乾燥化が著しいことから生息が危ぶまれる状態である。三峰山や十文字山周辺には現在でも生息が確認され、特に十文字山周

辺では個体数も多い。

【生態的特性】 自然度の高い森林で、林床がスズタケ群落や落ち葉、苔で覆われるような高湿環境に生息する。夜行性。

【生息地の条件】 原生林的な、湿度の保たれた林床を持つ森林環境が広範囲で連続して確保されていること。

【生存に対する脅威】 森林伐採、針葉樹の植林等による林床環境の変化、乾燥化。特に近年問題となっている鹿による草本類や樹木の樹皮食害は原生林の乾燥化に拍車をかけており、今後本種の生息にとって脅威となることが予想される。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕 **全県カテゴリー** 絶滅のおそれのある地域個体群 **全国カテゴリー** -

〔和名〕 **オクタマルマンオサムシ** 〔学名〕 *Carabus harmandi okutamaensis*

【摘要】 ホソヒメクロオサムシの亜種で、富士山から丹沢、奥多摩、秩父山地に分布する。冷涼なガレ場に生息し、産地は局所的である。

【形態の記載】 体長16～23mmと若干小さく、体色は黒色、艶は鈍い。前胸背板は小さく四角い。

【分布の概要】 本亜種は富士山から関東西部の山地帯の一部にかけて分布する。

【生息状況】 県内では山地帯から亜高山帯にかけて生息し、秩父市大血川上流や飯能市有間山など一部の低標高地で

も生息地が確認されている。

【生態的特性】 主に自然林の林床に生息し、山の稜線沿いに近い沢の源頭部など、礫の堆積が多いガレ場を好む。夜間に活動する。

【生息地の条件】 自然林のような、林床の湿度が高い環境で、山の北斜面のように気温が低く安定し、ガレ場が広範囲に確保されていること。

【生存に対する脅威】 森林伐採や植林による乾燥化。林道整備や砂防ダム建設、落石防止工事等によるガレ場の破壊。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕 **全県カテゴリー** 絶滅のおそれのある地域個体群 **全国カテゴリー** -

〔和名〕 **チチブホソクロナガオサムシ** 〔学名〕 *Carabus arboreus ogurai*

【摘要】 ホソクロナガオサムシの秩父山系特産亜種で、山地帯以上の高地に分布する。

【形態の記載】 体長18～25mmと比較的大型で、体型は細長く体色は黒色、上翅はやや褐色を帯びることが多い。クロナガオサムシと同所的に生息することがしばしば見られ、同定には注意を要する。体型と♂交尾器の形態の違い等により区別できる。

【分布の概要】 秩父山系の山地帯、亜高山帯に分布。

【生息状況】 オクタマルマンオサムシやホソアカガネオサムシと同様に秩父地方の高地でのみ記録されている。丘陵帯や低地帯での記録はクロナガオサムシの誤同定と

考えてよい。三峰山や十文字山付近で近年も生息が確認されている。

【生態的特性】 礫の堆積したガレ場を好み、自然林の林床にも生息する。オクタマルマンオサムシとほぼ同様の環境において見られる。夜行性。

【生息地の条件】 自然林のような、林床の湿度が高い環境で、山の北斜面のように気温が低く安定し、ガレ場が広範囲に確保されていること。

【生存に対する脅威】 森林伐採や植林による乾燥化。林道整備や砂防ダム建設、落石防止工事等によるガレ場の破壊。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕

【全県カテゴリー】 準絶滅危惧

【全国カテゴリー】 -

〔和名〕 セアカオサムシ

〔学名〕 *Carabus tuberculatus*

【摘要】 小型の美しいオサムシで、もともと県内での記録は少なく、荒地状の草原から湿地に移り変わる環境に生息することから、産地は限定されるものと思われる。

【形態の記載】 体長16~22mmと小型のオサムシで、前胸背板は通常明るい赤色金属光沢を、上翅はやや鈍い金属光沢で側縁は緑色味を帯びた金属光沢を有し、上翅の表面には瘤状の隆起がある。

【分布の概要】 国内では北海道から九州まで分布。

【生息状況】 低山帯~山地帯にかけてと、低地帯の中川・

加須低地より若干の記録が見受けられる。寄居町の荒川周辺では近年でも確認されている。

【生態的特性】 湿地や河川沿いの草地環境に生息し、畑地などでも得られる。

【生息地の条件】 水辺の草原環境が広範囲にわたり保存されていること。

【生存に対する脅威】 湿地や草原の開発行為、大型重機の侵入、湿地の乾燥化も生息に影響すると考えてよい。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕

【全県カテゴリー】 絶滅危惧Ⅱ類

【全国カテゴリー】 絶滅危惧Ⅱ類

〔和名〕 コハンミョウモドキ

〔学名〕 *Elaphrus punctatus*

【摘要】 本種は日本産ハンミョウモドキ類のうち最も小型の種で、これまで水田や湿地、果樹園の地表面などで得られており、全国的に記録は少ない。

【形態の記載】 ハンミョウモドキはその名のとおり、ハンミョウを思わせる大きな複眼に短い触角、そして金属光沢を帯びた体表面の彫刻が特徴的である。本種は黒鉄色で光沢が強く、オオハンミョウモドキやワタラセハンミョウモドキ、エゾハンミョウモドキに見られる紫や緑の光沢は現れない。

【分布の概要】 国内では北海道と本州の中部以北に分布する。

【生息状況】 埼玉県では低地帯から台地・丘陵帯で確認されている。これまで知られる産地は川口市、嵐山町で、

他に小川町から東秩父村にかけてのゴルフ場造成に伴うアセスメント調査でも本種の種名がリスト中に見られる。

【生態的特性】 本種の詳しい生態は判明していないが、県内では水田付近でいずれも確認されており、嵐山町の産地における観察ではスゲの生える湿地とやや湿田気味の水田の間にあるあぜ道を春先に歩行する様子が確認されている。渡良瀬遊水地ではワタラセハンミョウモドキとともにバイトトラップで得られており、湿地環境を好むのは間違いないと見ている。

【生息地の条件】 昔ながらの水田、また湿地環境が残されていること。

【生存に対する脅威】 土地改良事業に伴う水路整備、湿地の埋め立て、乾燥化など。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕

【全県カテゴリー】 絶滅危惧ⅠB類

【全国カテゴリー】 -

〔和名〕 カワラゴミムシ

〔学名〕 *Omophron aequale aequale*

【摘要】 まん丸の歩行虫。日本産カワラゴミムシ類は本種のみが分布しており、主に河原の砂地や溜池など水辺に生息し、地表面を回転するかのごとく走り回る。県内での生息状況は砂地に生息するカワラハンミョウやオサムシモドキとはほぼ同様と思われる。

【形態の記載】 体型は円形で、黄褐色に金属光沢を帯びた緑色紋がある。脚は細長く、♂は前跗節が広がる。

【分布の概要】 国内では北海道から九州にかけて分布。河川や池沼周辺に生息する。

【生息状況】 県内では低地帯から山地帯にかけての荒川流域に記録が集中し、他に利根川や高麗川の流域でも記録がある。最近の記録はあまりなく、特に荒川流域の産地

の多くは乗用車の乗り入れや河川改修により産地の環境が変わってしまい、生息条件は悪化している。その中で長瀬岩畳は現在でも生息が確認されている数少ない産地である。

【生態的特性】 河原などの砂地や水辺に生息し、他の昆虫類などを捕食しているものと思われる。主に夜行性で、灯火にも飛来する。

【生息地の条件】 広い砂地と水辺が確保されており、人的影響の少ない環境であること。

【生存に対する脅威】 河原への乗用車の乗り入れ、河川改修、産地の水没による消滅等。

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

④コウチュウ目

昆虫類

クモ類

甲殻類

多足類

軟体動物

扁形動物

哺乳類	〔コウチュウ目 オサムシ科〕 〔和名〕 オサムシモドキ 〔学名〕 <i>Craspedonotus tibialis</i>	全県カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 全国カテゴリー -
鳥類	〔摘要〕 河原の砂地に生息する特異な大型歩行虫。県内では記録が少なく、生息環境も特異であることから、生息状況は悪化していることが予想される。 〔形態の記載〕 体長20~24mmと大型で、色彩は黒色、表面の光沢が欠く。脚は脛節が黄褐色。 〔分布の概要〕 国内では北海道から九州まで分布。 〔生息状況〕 県内では低地帯の中川・加須低地と台地・丘陵帯から低山地にかけて分布が確認されている。河川敷に生息することから、生息地は限定される。	〔生態的特性〕 礫の転がる河原から砂地まで開けた環境に生息する。夜行性。カワラハンミョウやカワラバツタが生息するような環境において共に見られるが、個体数は多くない。 〔生息地の条件〕 開けた河川環境で砂地や礫環境が広範囲にわたって存在し、人為的影響が少ないこと。 〔生存に対する脅威〕 生息地である砂地への大勢の人や乗用車、オフロードバイク、大型重機等の進入による踏圧。改修工事等。
爬虫類	〔コウチュウ目 オサムシ科〕 〔和名〕 オンタケナガチビゴミムシ 〔学名〕 <i>Trechiana lewisi</i>	全県カテゴリー 情報不足 全国カテゴリー -
両生類	〔摘要〕 本州の中部山岳地帯の亜高山帯に分布する種で、森林の林床や沢の源頭部に生息しており、奥秩父でも尾根沿いに広く分布するものと思われるが、分布調査が進んでおらず詳細が解っていない。 〔形態の記載〕 体長6.2~7.0mmと大型で、全身銜色で体表面に虹色光沢を有する。触角と脚は長く、複眼も明瞭で、本州に産する <i>Trechiana</i> 属の中では比較的同定が容易な種である。 〔分布の概要〕 本州のみに分布する。	〔生息状況〕 奥秩父県境にある十文字山と、三峰山付近の白岩山から流れ出す大日向西谷の沢で得られた2例が知られるのみで、他に雲取山山頂にも生息するという情報がある。県境を接する奥秩父の稜線沿いには広く生息するものと考えられる。 〔生態的特性〕 山地の湿った林床や沢沿いの石下に生息する。 〔生息地の条件〕 亜高山帯において湿度の保たれた林床があること。
魚類・円口類	〔コウチュウ目 オサムシ科〕 〔和名〕 キバナガミズギワゴミムシ 〔学名〕 <i>Armatocillenus yokohamae</i>	全県カテゴリー 絶滅 全国カテゴリー -
④コウチュウ目	〔摘要〕 河口付近の潮間帯に生息するゴミムシで、自然河口の消滅に伴い全国的に産地が減少していることが予想される。県内ではさいたま市（旧浦和市）の田島ヶ原から唯一記録されただけで、その後半世紀以上確認されていない。 〔形態の記載〕 体長4.2mmと小型のゴミムシで、体型は細長い。体色は黒色、脚は黄褐色。大顎は発達し長く、和名の由来となっている。近似種とは上翅の色彩等により区別できる。 〔分布の概要〕 北海道から屋久島までの河口付近に分布。 〔生息状況〕 県内では低地帯の大宮台地に位置するさいたま市田島ヶ原の荒川が唯一の記録地であった。現在は環	境が変わってしまい、生息は望めない。県東南部の江戸川流域などでは汽水域に砂地と芦原が残っているので、生息を期待したい。 〔生態的特性〕 潮間帯に生息し、埼玉県のように海に隣接していない場所で、しかも内陸で確認されているのは奇跡的である。砂地の貝殻やゴミの下に隠れていて、日中活動するほか、夜間の灯火にも飛来する。 〔生息地の条件〕 河口に近く、汽水域で砂地や植生等の自然環境が良好な状態で保たれていること。 〔生存に対する脅威〕 河川の大規模改修、護岸工事、グラウンド造成等。
クモ類	〔コウチュウ目 オサムシ科〕 〔和名〕 ハマベミズギワゴミムシ 〔学名〕 <i>Bembidion semiluitum</i>	全県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 全国カテゴリー -
甲殻類	〔摘要〕 河口付近の芦原などに生息するミズギワゴミムシ。県内では荒川や江戸川等の下流域で僅かな産地が知られるが、護岸や開発等の影響で産地が減りつつある。 〔形態の記載〕 体長4.5mm程度の小さなゴミムシで、色彩	は緑銅光沢を帯びた黒色。脚は黄褐色。前胸背板は幅広で、上翅は卵形。 〔分布の概要〕 本州ならびに九州に分布。別亜種が琉球列島に分布する。
多足類		
軟体動物		
扁形動物		

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
④ コウチュウ目  
昆虫類  
クモ類  
甲殻類  
多足類  
軟体動物  
扁形動物

【生息状況】 県内では低地帯の大宮台地から中川・加須低地にかけて記録されており、現在でも千葉県や東京都との境にほど近い河川敷では生息地が点在している。

【生態的特性】 河口付近の潮間帯から芦原環境にかけて生息し、冬季でも暖かい日中には活動する。芦原では根際

の隙間や地中に開いたカニ穴などを走り回る。

【生息地の条件】 河口に近く、汽水域で砂地や植生等の自然環境が良好な状態で保たれていること。

【生存に対する脅威】 河川の大規模改修、護岸工事、グラウンド造成等。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕 ニッコウオオズナガゴミムシ 〔学名〕 *Pterostichus macrogenys*

【摘要】 山地の沢沿いに生息する大型のナガゴミムシで、大きな頭部が特徴的である。県内での産地は限られる。林道工事や護岸工事等の影響で沢の原頭部において乾燥化が進むと産地が失われる可能性がある。

【形態の記載】 20mm程度の大型ナガゴミムシ類で、頭部が大きく発達し、大顎は左側が長く伸長し先端が強く曲がる。全身黒色で光沢が強い。

【分布の概要】 関東西部から北部、長野、新潟の山地に分布する。従来東日本各地から採集され本種とされていたものは最近の研究で♂交尾器内袋の形状等により細かく細分された。

【生息状況】 県内では低山帯から山地帯にかけてわずかに

記録され、いずれの産地も局所的である。

【生態的特性】 ガレ場の地中深くに生息し、地上部に出てくる個体は多くない。このため採集される個体はほんの一部と思われる。地中深くに埋めたトラップで多くの個体が得られることもあるが、そうしたガレ場環境が広範囲で存在する場所は限られる。

【生息地の条件】 地下深くにまで礫が堆積するガレ場が広範囲に渡って存在すること。またそうした場所が低温高湿状態で保たれていること。

【生存に対する脅威】 森林伐採や植林等による乾燥化。林道整備や砂防ダム建設、落石防止工事等によるガレ場の破壊。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕 チョウセンゴモクムシ 〔学名〕 *Harpalus cratus*

【摘要】 主に河原の荒地環境に生息する種で、外来植物による植生の変化や河川工事等の影響で産地が減りつつある。

【形態の記載】 体長12~16mm程度と比較的大きく、幅広で厚みのある体型、色彩は黒色で上翅には弱い銅色光沢があり、♂は艶が強く♀は鈍い。ツヤアオゴモクムシによく似ており、慣れないと同定は難しい。

【分布の概要】 国内では本州のみに分布し、全国的に記録の少ない種である。

【生息状況】 低地帯から低山帯にかけて記録があり、河川敷などの荒地環境に生息する。都幾川や越辺川、荒川などでいくつか確実な産地があるが、都幾川の東松山市上押垂の産地は重機による土砂の移動が行われ、その結果環境が著しく変化し本種は絶滅に瀕している状態である。こうした行為は他の産地でも容易におこりうることで、今後河川改修や除草作業に伴う機械の進入等の影響が懸念される。

【生態的特性】 河川敷等の荒地環境に生息し、昼間は大きな石の下等に潜んでいる。夜行性で灯火にも飛来する。

【生息地の条件】 河川敷等の荒地環境が広範囲で確保され、乗用車や大型重機、乗用草刈機、オフロードバイク等の進入がないこと。植生の遷移が進行しない程度に河川の氾濫が起こる場所であること。

【生存に対する脅威】 植生の遷移による森林化、外来植物の侵入による植生の変化、乗用車や大型重機、乗用草刈機、オフロードバイク等の進入による河原や地面の踏圧、河川改修、グラウンド造成等。

【特記事項】 本種はかつて野焼きが行われてきた場所を好んで生息し、現在でも野焼きが毎年実施されている栃木県渡良瀬遊水地では多数の個体が生息している。こうした環境を好む種はほかにも存在し、いずれも現在は希少種となりつつある。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕

全県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類

全国カテゴリー -

〔和名〕 オオヨツボシゴミムシ 〔学名〕 *Dischiissus mirandus*

【摘要】 日本産最大級のヨツボシゴミムシで、湿地周辺の森林環境に生息するが県内ではほとんど記録がなく、かつて本種の多産地として知られた渡良瀬遊水地での生息状況の悪化等から判断して、県内でも同様の傾向にある

ものと思われる。

【形態の記載】 体長17~19mmと大型で、色彩は黒色に上翅には黄色の四つ紋がある。



哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
④コウチュウ目  
昆虫類  
クモ類  
甲殻類  
多足類  
軟体動物  
扁形動物

**【分布の概要】** 本州から琉球列島まで広く分布し、離島にも多くの産地がある。伊豆諸島では個体数も多く、夜間灯火に集まる個体が採集される。栃木県の渡良瀬遊水地は本種の多産地として知られ、以前は数十頭がアカガネオサムシや多くのアオゴミムシ類とともに朽ち木内にまとまって越冬するのが観察されたが、現在では乾燥化が進み個体数も減っている。  
**【生息状況】** 低地帯の一部と台地・丘陵帯にわずかな記録がある。近年でも生息が確認されているのは嵐山町杉山の役場庁舎付近であり、他からは長い間記録がない状況

である。台地・丘陵帯の谷津田と雑木林が接するような環境を調べることで新たな産地が見つかる可能性が高い。  
**【生態的特性】** 湿地や河川、谷津田といった水辺環境と森林が接する場所に生息し、越冬は成虫で、朽木の中や崖の土中において行われる。カタツムリ類を捕食しているものと思われ、生息には餌となる生物の個体数も重要。  
**【生息地の条件】** 森林と湿地や谷津田、河川等の水辺環境が接する場所が保存されていること。  
**【生存に対する脅威】** 森林伐採、湿地の埋め立て、大型重機の進入、乾燥化等。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕 **全県カテゴリー** 準絶滅危惧 **全国カテゴリー** 絶滅危惧Ⅰ類  
〔和名〕 **チビアオゴミムシ** 〔学名〕 *Eochlaenius suvorovi*

**【摘要】** 北東部の平野を流れる河川沿いや湿地において、いくつか産地が確認されているが、個体数や生息範囲が限られる。  
**【形態の記載】** 体長8.7~9.2mm。小型で細長く、全身金緑色。細毛に覆われる。口器、触角、脚は赤褐色。  
**【分布の概要】** 国内では本州のみに分布。  
**【生息状況】** 県内では低地帯のみから記録され、主に荒川流域に分布しているほか、茨城県と県境を接する渡良瀬遊水地の埼玉県側でも1ヶ所産地がある。

**【生態的特性】** 大河川や大きな池沼などの周囲で、氾濫すると完全に水没するようなヨシなどが生い茂る湿地環境に生息し、冬季は朽ち木の中や石の下、ヨシの根際などで越冬する。  
**【生息地の条件】** 河川や池沼沿いの湿地環境が広範囲で保たれており、越冬に適した朽ち木などが確保されている場所があること。  
**【生存に対する脅威】** 湿地の埋め立て、乾燥化。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕 **全県カテゴリー** 準絶滅危惧 **全国カテゴリー** -  
〔和名〕 **ヒトツメアオゴミムシ** 〔学名〕 *Chlaenius deliciolus*

**【摘要】** 丘陵地の桑畑跡等に生息するアオゴミムシの美麗種。一般的に個体数は少なく、一度に多数の個体が確認されることは極めて稀である。本種の生息環境である桑園等の荒廃により、今後産地が減る可能性がある。  
**【形態の記載】** 体長10~11.5mm。頭部は金緑色、前胸背板、口器、触角、脚、上翅の側縁、は赤褐色で、上翅は暗青色、上翅会合部の後方には赤褐色の丸い紋があり、和名の「一つ目」の由来となっている。  
**【分布の概要】** 本州、四国、九州に分布。  
**【生息状況】** 県内では台地・丘陵帯から低山帯にかけての狭い範囲にのみ生息しており、いずれの産地でも個体数

は少ない。  
**【生態的特性】** 松林や桑園など、丘陵地のやや開けた裸地的環境に生息し、特に水路の周辺に良く見られる。主に夜間活動するが昼間も活動し、苔生した地表面をすばやく走り回る。越冬は崖のような場所で行われることが多く、水路際に露出した崖は格好の越冬場所である。  
**【生息地の条件】** 台地・丘陵帯から低山帯にかけての桑園など裸地的環境が周囲の水路とともに昔ながらの形状で保存されていること。  
**【生存に対する脅威】** 丘陵地での住宅地等開発行為、桑園や松林の荒廃による草原化、水路の護岸など。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕 **全県カテゴリー** 絶滅危惧ⅠB類 **全国カテゴリー** 絶滅危惧Ⅰ類  
〔和名〕 **アオヘリアオゴミムシ** 〔学名〕 *Chlaenius praefectus*

**【摘要】** 全国的に近年の記録が減っている種で、埼玉県では県東部の平野部に記録が集中していることから、市街地の発達等に伴い、いずれの産地も危険な状況と思われる。  
**【形態の記載】** 体長16.5~17mmとやや大型のアオゴミムシ。頭部、前胸背板はやや緑色味を帯びた赤色金属光沢を有し、上翅は黒色で側縁には青味がかかった金属光沢を生じる。口器、触角、脚は赤褐色。スジアオゴミムシに外見が似ているが、前胸背板の形態や上翅表面の状態により

区別できる。  
**【分布の概要】** 国内では本州、四国、九州、琉球に生息。東南アジアに広く分布する種である。  
**【生息状況】** 低地帯の荒川流域とその周辺における記録が散見されるが、最近の記録はない状態である。本庄市（旧児玉町）の間瀬湖における低山帯からの記録は分布上疑問があり、標本確認を要する。

【生態的特性】水路や河川周辺の湿地から山林に移行する環境に生息するものと思われ、いずれもそうした場所から得られている。近年における確実な産地の報告が無く、生態的には未解明な部分が多い。

【生息地の条件】水路や河川周辺において湿地から山林、

あるいは竹林など屋敷林に移行する環境が保存されていること。また、その付近に越冬に適した崖などの環境が保存されていること。

【生存に対する脅威】低地帯における水路や河川周辺の開発行為、乾燥化など。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕

全県カテゴリー 絶滅

全国カテゴリー -

〔和名〕ツヤキベリアオゴミムシ 〔学名〕*Chlaenius spoliatus motschulskyi*

【摘要】湿地や池沼の水辺に生息する大型の美麗アオゴミムシ。近年は産地がほとんどなくなってしまい、千葉県などの一部の産地で生息が確認されているにすぎない。埼玉県では50年以上記録が無く、絶滅したものと思われる。

【形態の記載】美しいゴミムシで、背面は赤銅色を帯びた金緑色。上翅の縁は黄白色で、脚も同様。良く似たコキベリアオゴミムシとは前胸背板がより幅広いこと、体形の違いなどにより識別できる。

【分布の概要】本州と四国に分布し、朝鮮半島と中国のものも同亜種とされる。基亜種は中国北部からシベリア、ヨーロッパにかけて広く分布。

【生息状況】低地帯や低山帯の荒川河川敷で若干の記録があるが、開発の度合いや現在の環境条件からみて生息の可能性は極めて低い。長瀨町の産地では夜間調査を継続中であるが、未だ新たな情報は得られないままである。

【生態的特性】湿地や池沼等の水辺に生息。夜行性で水際をたいへんすばやく走り回る。越冬は乾燥した粘土質の崖で行われるようである。

【生息地の条件】平野部で、湿地や池沼等の水辺環境とそれに隣接した越冬に適している崖があること。

【生存に対する脅威】水辺の護岸、湿地の埋め立て等。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕

全県カテゴリー 絶滅危惧 I B 類

全国カテゴリー -

〔和名〕クビナガキベリアオゴミムシ 〔学名〕*Chlaenius prostenus*

【摘要】低湿地に生息するアオゴミムシの一種で全国的にも記録が少なく、関東の平野部での分布状況や県内での確認状況を考えると生息状況は危機的状態であると思われる。

【形態の記載】体背面はやや黄色味を帯びた緑色の金属光沢を放ち、つやは鈍い。上翅の側縁は黄褐色である。本種と良く似たヒメキベリアオゴミムシとは、本種の腹面が褐色を帯びるのに対し、ヒメキベリアオゴミムシの腹面は黒色であることから区別できる。

【分布の概要】国内では本州、四国、九州に分布するが全国的にさほど多くない種であり、関東地方では千葉県や

茨城県、栃木県でいくつか産地が知られている。

【生息状況】埼玉県では過去に戸田市の古い記録があるのみで、ほかに報告がない。

【生態的特性】低湿地に生息する種である。アオゴミムシ類の種類数が多く見られる場所に生息し、特にオオトックリゴミムシやツヤキベリアオゴミムシなどとともに見られることが多い。

【生息地の条件】低湿地の中でも水際に越冬可能な粘土質の崖が多い場所には多産することから、護岸されていない溜池などが最も生息に適している。

【生存に対する脅威】水辺環境の護岸等。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕

全県カテゴリー 絶滅

全国カテゴリー -

〔和名〕オオヒラタトックリゴミムシ 〔学名〕*Oodes virens*

【摘要】県内ではすでに絶滅したと思われる種。日本各地の記録から推察するとオオアオホソゴミムシと同様の環境で得られているようである。

【形態の記載】体長15.5~17mm。日本産最大の大型トックリゴミムシ類で、体型は幅広くそして平たく、体色は全身黒色。

【分布の概要】国内では本州、四国、九州に分布。東南アジアに広く分布する。

【生息状況】県内では低地帯のみ、戸田市戸田橋、さいたま市（旧浦和市）の岸町と秋ヶ瀬の計3ヶ所から記録されているのみで、これらは埼玉県昆虫誌以前の採集例である。いずれの産地も環境が記録当時と比べてかなり変化しており、すでに絶滅したものと思われる。また、県内はもとより、関東における近年の採集例は無いことから、県内でも絶滅した可能性が極めて高い。

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

④コウチュウ目

昆虫類

クモ類

甲殻類

多足類

軟体動物

扁形動物

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
④コウチュウ目  
昆虫類  
クモ類  
甲殻類  
多足類  
軟体動物  
扁形動物

【生態的特性】 平野部から低山帯にかけて生息し、大河川や池沼の周囲などで得られているがほとんどの記録が夜間灯火採集によるもので、本来の生息環境がどのようなものであるのかは明確でない。しばしばオオアオホソゴミムシとともに得られており、同様の環境に生息していたものと判断する。

【生息地の条件】 平野部から低山帯にかけて、大河川や池沼の周囲などに湿地や森林などの環境が大きな変化なしに保存されていること。

【生存に対する脅威】 生息地における開発行為。乾燥化など。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕

全県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類

全国カテゴリー -

〔和名〕 クロモンヒラナガゴミムシ 〔学名〕 *Hexagonia insignis*

【摘要】 河川沿いのオギやヨシ、ススキの葉の隙間に生息する種で、生息状況から判断して生息には草原の規模や湿度が重要であると考えられる。県下ではいくつか産地が確認されたが、いずれの場所でも個体数は少ない。

【形態の記載】 体長7.5~8.5mm。扁平で長細く、頭部が大きく発達。頭部ならびに前胸背板は暗赤褐色で、上翅は赤褐色に会合部の後半に黒色の大きな紋を生じる。

【分布の概要】 国内では本州、四国、九州に分布し、国外では台湾に分布する。

【生息状況】 低地帯からのみ記録されており、荒川や利根川沿いに産地が集中している。現在でもいくつかの産地で生息が確認されているが個体数ならびに生息範囲は限られており、生息安泰とは言いがたい状況である。

【生態的特性】 河川や湿地の水際に生えるオギ、ヨシ、ス

スキなどの植物の葉と茎の隙間に入り込んで生活している種で、これらの植物でも生育旺盛な株でない葉の隙間に入り込めないことから、植物群落内でも生息範囲が水際の一部に限定される。幼虫も同様の環境で生活するほか、越冬は成虫で行い、生息地の地表面で落葉の隙間や石下などで行われる。冬季の野焼きによる越冬個体への影響はあまり無いようで、焼け跡の石下や落葉下から越冬個体が見つかる。灯火にも飛来する。

【生息地の条件】 大河川とその周囲の水域において、オギなどの生息環境に適した植物の群落が大規模に保存されていること。

【生存に対する脅威】 水辺のオギなどの植物群落の衰退。乾燥化。水辺の護岸など。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕

全県カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類

全国カテゴリー -

〔和名〕 ハガクビナガゴミムシ 〔学名〕 *Odacantha hagai*

【摘要】 近年、関東地方の低湿地より発見、新種記載された小型のクビナガゴミムシ。県内ではいくつか新たな産地が見つかる一方、既知産地でその後確認できないなど、依然として生息が危ぶまれる状況である。

【形態の記載】 頭部ならびに前胸は黒色で緑色がかかった金属光沢を帯び、上翅は黄褐色で会合部ならびに側縁に黒色紋を持つ。しばしば同所的に生息するチャバネクビナガゴミムシやナカグロキバネクビナガゴミムシに外見が似ているので注意が必要である。

【分布の概要】 北海道から関東までの湿地に限られ、分布の南限は神奈川県箱根の仙石原である。

【生息状況】 埼玉県では低地帯から台地・丘陵帯までの湿地環境に生息するがその産地は局所的で、県内での大きな産地はこれまで見つかっていない。現在確認されているのは春日部市（旧庄和町）、川口市、さいたま市、日高市、東松山市、嵐山町の各市町より計7ヶ所であり、

このうち東松山市の2ヶ所と嵐山町の産地では近年生息が確認されておらず、これらの産地は環境の変化により絶滅した可能性もある。

【生態的特性】 スゲ類の生える低湿地を好み、水際に生える植物の根際に生息する。越冬は成虫で、根際にうずくまった状態で行なう。食性については不明であるが、湿地に生息するウンカ類などの生物を捕食しているものと思われる。

【生息地の条件】 スゲ類が生えるような、良好な湿地環境の保たれた場所のみ生息する。

【生存に対する脅威】 湿地の埋め立て、乾燥化による湿地環境の変化、植生の遷移による森林化など。

【特記事項】 日本に生息するクビナガゴミムシ類の中では一番北に分布域のある種で、湿原環境の生態系を考えた場合、今後温暖化の影響から植生の変化などに伴い分布状況にも影響が出てくる可能性のある種である。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕キノゴミムシ

〔学名〕*Lioptera erotyloides*

【摘要】日本産最大のキノゴミムシで、大きな橙色紋が特徴。樹液などの周囲で観察されるが個体数が少なく、生息地も限定される。

【形態の記載】体長13~15mm。大型のキノゴミムシ類で、全身黒色に上翅は橙色紋を4つ生じ、オオキノコムシ類やヨツボシケンキスイなどの斑紋に良く似ている。頭部と前胸背板には皺が多く、上翅の条溝は浅い。

【分布の概要】国内では北海道から九州まで分布。

【生息状況】低地帯の大宮台地、台地・丘陵帯の日高市、

秩父地方では低山帯の外秩父山地や最深部の川又からそれぞれ記録されている。

【生態的特性】雑木林や自然林に生息し、クヌギなどの樹液が豊富に染み出る樹木やキノコに集まる。夜行性で、樹液の染み出し口周辺で観察することができる。

【生息地の条件】雑木林や自然林などで、クヌギなど樹液が豊富に染み出る樹木が多く確保されていること。キノコ類が生育しやすい湿潤な森林環境であること。

【生存に対する脅威】森林伐採、乾燥化、開発行為。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕アリスアトキリゴミムシ

〔学名〕*Lachnoderma asperum*

【摘要】神奈川県箱根の宮ノ下でジョージ・ルイスにより蟻の巣と石下のそれぞれより得られた2個体を基に記載された種。近年の観察で、和名の「蟻巣」のとおり、好蟻性であることが再確認された。

【形態の記載】体型は幅広で、全身が長い硬毛に被われ、体色は黒色で上翅は通常赤褐色である。

【分布の概要】国内では本州のみに分布するようである。

【生息状況】埼玉県内ではさいたま市田島ヶ原より記録されたのが最初で、その後約40年の後に東松山市と嵐山町の都幾川河川敷より再記録された。小川町から東秩父村にかけてのゴルフ場造成に伴うアセスメント調査でも本種の種名がリスト中に見られる。

【生態的特性】ケアリ類と関わりを持つ好蟻性のゴミムシで、県内ではいずれも河川敷のススキやヨモギが生える礫と土の混ざった河原において、カワラケアリの巣や行列、

またその周囲から見つかっている。越冬は河原の石下やススキの根際などで行われるようである。

【生息地の条件】カワラケアリなどのケアリ類が多数生息する場所。礫と土の混ざった荒地で、周囲にオギやススキなどの植生がある環境はまさに好条件と言える。近年、栃木県の渡良瀬遊水地などでも本種の産地が確認されているが、いずれも同様の環境である。

【生存に対する脅威】河川敷の植生遷移が進み森林化すること。また、改修工事やグランド造成、レジャーへの活用なども大きな脅威となる。

【特記事項】2002年版で述べた東松山市上押垂の都幾川河川敷の産地は、バイクが進入していた場所が大型重機により均されてしまい、その後全く確認できなくなった。幸いにして付近の環境は無事であるが、現状は極めて危険な状況と言える。

〔コウチュウ目 オサムシ科〕

全県カテゴリー 絶滅

全国カテゴリー -

〔和名〕オオアオホソゴミムシ

〔学名〕*Desera geniculata*

【摘要】埼玉県内では県東部の低地帯から古い記録が2例知られるのみで、関東一円の近年における採集状況を考えると、すでに絶滅したか、それに近い状況である可能性が高い。

【形態の記載】頭部、前胸背板、上翅共に細長く、触角は第1節が長く伸長し、大顎も細長く伸びる。色彩は青色味を帯びた銅色光沢で、口器、触角、脚は赤褐色で部分的に黒色の紋を有する。

【分布の概要】国内では本州から琉球まで幅広く分布するとされ、関東地方では千葉県から茨城県にかけて記録が散見されるものの決して多くはない。

【生息状況】埼玉県内では利根川流域に1例、荒川流域に1例が確認されるのみで、最近の記録は無い。

【生態的特性】多くの個体は夜間の灯火で得られており、水辺に生息するものと考えられるが詳しい生息環境は明らかでない。オオヒラタトックリゴミムシとともに得られることもあるようで、両者は同様の環境を好んで生息していたものと思われる。

【生息地の条件】大規模な開発の手が入っていない水辺が確保されていること。

【生存に対する脅威】水辺の開発行為、乾燥化、植生の遷移など。

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

④コウチュウ目

昆虫類

クモ類

甲殻類

多足類

軟体動物

扁形動物

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
④コウチュウ目  
昆虫類  
クモ類  
甲殻類  
多足類  
軟体動物  
扁形動物

[コウチュウ目 クビソゴミムシ科] **全県カテゴリ** 準絶滅危惧 **全国カテゴリ** -  
〔和名〕アオバネホソクビゴミムシ 〔学名〕*Brachinus aeneicostis*

【摘要】小型のホソクビゴミムシで、腹部末端部からは音を発しながら、本科の特徴でもある高熱ガスを噴射する。関東では低湿地に生息するが産地は限られる。  
【形態の記載】上翅がやや緑色がかった金属光沢を持ち光沢が鈍く、全身は橙黄褐色。形態的にはコホソクビゴミムシに大きさ、形状共に似ているので注意が必要である。  
【分布の概要】国内では本州と九州より記録され、関東地方では千葉県や茨城県、栃木県でまだ各所に産地が残るが、関東の西部では記録自体が少ない。  
【生息状況】埼玉県ではさいたま市（旧浦和市）田島ヶ原の古い記録と皆野町の記録のみ。皆野の記録は同定が疑わしいこと、また分布にも疑問があることから標本確認の必要がある。田島ヶ原では現地調査を実施しているに

も関わらず本種の最近の記録がないため、あるいはこの地域において既に絶滅したか、絶滅危惧の状態である可能性がある。千葉県等の埼玉県近隣における分布を見ると、県東部の平野で湿地環境から新たな産地が見つかるかもしれない。  
【生態的特性】低地帯の湿地環境に生息。ヨシ原などで水がある程度溜まる場所に多く、冬季はそうした環境にある朽木や崖の中で越冬する。  
【生息地の条件】良好な湿地環境が残され、なおかつ越冬に必要な朽木や崖といったものが安定的にあること。  
【生存に対する脅威】湿地環境の乾燥化。造成等に伴う湿地の埋め立て、越冬環境となる崖の護岸など。

[コウチュウ目 クビソゴミムシ科] **全県カテゴリ** 絶滅危惧 I B 類 **全国カテゴリ** -  
〔和名〕ヒメホソクビゴミムシ 〔学名〕*Brachinus incomptus*

【摘要】とても小さいホソクビゴミムシで、全国的にも記録が少なく、関東では千葉県で確実な産地が知られている。埼玉県では秩父から記録されていたが標本確認の結果コホソクビゴミムシの誤同定であり、県下からの既知記録は無くなった。今回の調査では新たな標本を確認した。  
【形態の記載】丸みを帯びた形態、灰色の上翅が特徴。生時は徘徊する様子がクモの一種のように見える。  
【分布の概要】本州と九州に分布する。  
【生息状況】今回の標本調査で浦和の田島ヶ原産個体が複数確認できた。古い標本であり、その後環境が大きく変化していることや、関東全域での生息状況を考慮すると、県内での生息状況は極めて厳しいものと思われる。秩父の記

録は誤同定であるので削除する。  
【生態的特性】大きな河川や溜池の水際に生息し、越冬は粘土質の崖や朽木中で行われることが多い。詳しい生態はわかっていない。  
【生息地の条件】本種の好む良好な水辺環境と越冬できる崖や朽木が安定的に保たれていること。  
【生存に対する脅威】水辺の護岸、乾燥化など。  
【特記事項】国立科学博物館所蔵標本のデータは次のとおり。27頭, 20.III.1956, Tajimagahara, Saitama Pref., Y. Kurosawa et M. Kobayashi (NSMT-I-C, 33660~33673, ただしこの番号がついた28頭中の1頭についてはハネビロアトキリゴミムシの標本である)。

[コウチュウ目 ガムシ科] **全県カテゴリ** 絶滅危惧 I B 類 **全国カテゴリ** 絶滅危惧 II 類  
〔和名〕セスジガムシ 〔学名〕*Helophorus auriculatus*

【摘要】箱根宮ノ下より得られた個体をもとに記載された北方系のガムシ。この仲間ではわが国で最も南に分布する種である。  
【形態の記載】体長5~6mm。黒色で前胸背板と上翅、触角、脚は濃い黄褐色である。前胸背板は5列の縦溝がある。  
【分布の概要】本州でも東日本の限られた地域にのみ分布し、全国的にも絶滅危惧II類に位置づけられている。  
【生息状況】県東部の低地帯と秩父の低山帯から記録があるが、いずれの産地でも生息が確認できない状況である。北本市の産地では環境の変化により絶滅した可能性もある。

平野部では最近の記録が無いので、今回より危険度の高い扱いとした。秩父地方では最近のも含めいくつか記録があるが、全国的な確認状況や現地調査での再確認が出来ないことを考えると、誤同定の可能性もあるので標本確認の必要がある。  
【生態的特性】低湿地に生息し、水溜りをすくったりして得られる。  
【生息地の条件】水辺の植物が豊富で、汚水や農薬が流入しない池沼や湿地があること。  
【生存に対する脅威】水辺環境の周辺も含めた開発。埋め立て、農薬散布等。



〔コウチュウ目 ガムシ科〕

全県カテゴリー 絶滅危惧ⅠA類

全国カテゴリー -

〔和名〕 ガムシ

〔学名〕 *Hydrophilus acuminatus*

〔摘要〕 日本産最大のガムシ科甲虫で、かつては日本全国どこでも見られた種。埼玉県内では記録自体は多いが、古い記録がほとんどで、近年の記録が全く無いことから平野部では絶滅した可能性が高い。低山帯では産地が残っているとの情報もあるが、詳細は不明。

〔形態の記載〕 大型の水生甲虫で、体表面は光沢が強くやや灰緑色味を帯びた黒色。中、後脚跗節には毛の束があり、また中、後脛節先端には鋭い棘を持つ。

〔分布の概要〕 北海道から九州にかけて分布。

〔生息状況〕 県内では低地帯から低山帯にかけて広く分布していたようで、古い記録は多いものの、最近の記録は

全く無い。

〔生態的特性〕 田んぼやその周辺の用水路、溜池に生息し、水中生活を送る。灯火にも良く飛来する。農業等の影響を受けやすく、昭和期には全国的にその影響で激減し、埼玉県内でも1980年代までにはほとんどの地域で絶滅したと思われる。

〔生息地の条件〕 昔ながらの水田、水路、溜池が保たれ、なおかつ過去に大量の農業等が使用されたことの無い場所があること。

〔生存に対する脅威〕 生息水域への薬剤の流入、圃場整備に伴う生息環境の改変行為等。

〔コウチュウ目 エンマムシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕 ヤマハマベエンマムシ

〔学名〕 *Hypocaccus subaenus*

〔摘要〕 県内では最近になって生息が確認された種で、河川上流域の砂地に生息する。開発による生息地の減少が危惧される。

〔形態の記載〕 体長2.6~2.9mmと小型の種で、全身黒色にやや緑がかった銅色光沢を有する。良く似た種にカラカネハマベエンマムシやヒメハマベエンマムシ、ニセハマベエンマムシ、ハマベエンマムシがいるが、表面の点刻や条線の違い、また生息環境の違いなどで識別することができる。

〔分布の概要〕 本州の山岳地帯とその周辺にのみ分布。

〔生息状況〕 山地帯の溪流~清流の砂地河原に生息が確認

されており、既知産地はいずれもダム工事の影響を受けて水没した。生息に適した環境は県内でもほかにあることから、新たな産地の発見が期待される。

〔生態的特性〕 河川沿いの砂地に生息し、日中の晴天時に低い位置を飛び回る。

〔生息地の条件〕 山地帯の清流~溪流において、河原に砂地環境が広範囲で保たれている場所があること。

〔生存に対する脅威〕 河川改修、護岸工事、砂の採取、ダム建設による産地の水没、レジャー目的の人や乗用車の砂地への頻繁な侵入など。

〔コウチュウ目 エンマムシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕 ルリエンマムシ

〔学名〕 *Saprinus splendens*

〔摘要〕 県内では記録の少ない美麗エンマムシ。草原を好む種で、利根川など広範囲に草原が残る地域では現在でも生息が確認されている。

〔形態の記載〕 比較的大型のエンマムシで、体型は丸く、黒色で全体に青色の金属光沢を有する。

〔分布の概要〕 北海道から琉球まで全国に分布する。

〔生息状況〕 県内では低地帯から台地・丘陵帯にかけてわずかな記録があるのみで、産地は限られるようである。

〔生態的特性〕 河川敷などの草原を好み、草地やあるいはは湿地で見られ、動物の死骸や糞などに集まりハエ目の幼虫などを食べているものと考えられる。

〔生息地の条件〕 河川敷など広範囲に草原環境が残されていること。また餌の供給源となる動物の死骸や糞が安定的に確保されていること。

〔生存に対する脅威〕 河川改修等に伴う草原環境の改変、攪乱。

〔コウチュウ目 ダルマガムシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕 ヨシトミダルマガムシ

〔学名〕 *Hydraena yoshitomii*

〔摘要〕 沢の源流で特に細流に生息する種で、埼玉県から最近記載された。生息環境が限られており、水量や水質の影響を受けやすい種であることが予想されるため、流路の工事等の影響を受けやすいものと判断する。

〔形態の記載〕 体長1.4~1.6mmと小さい。小顎鬚が長く、体型は扁平で長細く、表面には点刻があり、全身暗褐色。

〔分布の概要〕 本州の関東地方西部に分布。

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

④コウチュウ目

昆虫類

クモ類

甲殻類

多足類

軟体動物

扁形動物

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
④コウチュウ目  
昆虫類  
クモ類  
甲殻類  
多足類  
軟体動物  
扁形動物

**【生息状況】** 山地帯と台地・丘陵帯から確認されている。基準産地は飯能市戸丸で、他に日高市五条大滝や小鹿野町（旧両神村）白井差の昇竜の滝、秩父市（旧大滝村）中津川渓谷最深部の三国峠付近などからも採集している。  
**【生態的特性】** 湧水の湧出口や滝の周辺など、水深がほとんど無い程度の細流に生息し、水流中に半分水没したような手のひら大の石の表面にしがみついていることが多い。小型のため慣れないと発見が困難である。  
**【生息地の条件】** 湧水の湧出口や滝の周辺、河川の水際などで水深の浅い流れのある環境があること。それらの環境は水質が良好で、なおかつ水温が低い状態であること。

**【生存に対する脅威】** 水辺の護岸、河川改修、水質汚濁の原因となる周辺での家庭雑排水の流入やし尿の土中への浸透など。  
**【特記事項】** 小鹿野町日尾の吉田川から同属のホソダルマガムシ *H. riparia* が記録されている（大熊・黒澤，1992；同，1995）が、この種は本州では高層湿原に生息する種であり、埼玉県に分布しているとは考えにくい。ヨシトミダルマガムシが記載される以前の記録でもあることから、あるいはこの記録は本種である可能性もある。標本の再確認が望まれる。

〔コウチュウ目 タマキノコムシ科〕 **全県カテゴリー** 準絶滅危惧 **全国カテゴリー** -  
〔和名〕 カントウコチビシデムシ 〔学名〕 *Sciodreporoides pulvialis*

**【摘要】** 埼玉昆虫談話会が主催した北本市石戸宿の昆虫調査で得られた個体を基に、新種として記載された。谷戸の湿地や河原の荒地に生息し、今回の調査によってホンシュウカヤネズミの巣やアカネズミの坑道のため糞から得られることがわかった。  
**【形態の記載】** 体長2.8～3.3mm。体型は涙形で全身黒色～暗褐色で灰色の毛に覆われる。  
**【分布の概要】** 関東の平野部における水辺に分布。  
**【生息状況】** 県内では低地帯から台地・丘陵帯にかけて記録され、基準産地の北本市石戸宿のほか、東松山市毛塚の九十九川脇にあった湿地、嵐山町大蔵の都幾川河川敷地内、熊谷市押切の荒川河川敷の草地からそれぞれ確認

している。  
**【生態的特性】** 谷戸の湿地や河原の荒地環境に生息し、ホンシュウカヤネズミの巣やアカネズミの坑道のため糞に依存しているようである。冬季にはススキの根元に堆積した落葉中やカヤネズミの古巣から越冬中の成虫が得られる。基準標本は梅雨の時期と晩秋に得られているが、早春にも越冬後の個体が得られている。  
**【生息地の条件】** 谷戸の休耕田や廃田、その周辺の水路といった湿地環境、また河川敷のススキやオトコヨモギなどが生える荒地的な草原環境において、ネズミ類が多く生息する場所が確保されていること。  
**【生存に対する脅威】** 河川改修、湿地の埋め立て造成等。

〔コウチュウ目 シデムシ科〕 **全県カテゴリー** 絶滅のおそれのある地域個体群 **全国カテゴリー** -  
〔和名〕 ホンドヒロオビモンシデムシ 〔学名〕 *Nicrophorus investigator latifasciatus*

**【摘要】** 山岳地帯の高所に分布するモンシデムシ。生息地が限定されており、各地域の個体群が平野によって分断されることからこの地域の個体群の存在は貴重である。  
**【形態の記載】** 上翅にある4つの赤色紋のうち前の2つは中央でつながり、後ろの2つもほぼつながった状態で、結果として2本の幅広い横帯状となる。赤色紋の中に黒い小紋は現れない。  
**【分布の概要】** ヨーロッパからシベリア、北米、日本では北海道に分布するヒロオビモンシデムシの別亜種で、本州、四国、九州の高地のみ生息する。  
**【生息状況】** 山地帯の秩父市（旧大滝村）で2例が記録さ

れており、このほかに秩父市大血川上流から追加されている。実際には亜高山帯が本来の生息域と考えられるが調査不十分である。  
**【生態的特性】** 大型動物の死骸に集まる。夏季は冷涼な亜高山帯で活動し、秋季になると山地帯まで降りてくるようである。標高2,000m以上の山地が背後にひかえている地域で生息が確認される。  
**【生息地の条件】** 亜高山帯に野生動物の数が豊富な自然林が残されていること。  
**【生存に対する脅威】** 野生動物の個体数の減少。自然林の伐採や開発行為による環境悪化。

〔コウチュウ目 シデムシ科〕 **全県カテゴリー** 準絶滅危惧 **全国カテゴリー** 準絶滅危惧  
〔和名〕 ヤマトモンシデムシ 〔学名〕 *Nicrophorus japonicus*

**【摘要】** 平野部の河川沿いのヨシ原等に生息する大型のモンシデムシで、生息条件としては水辺の大型動物の個体数が重要である。県内では記録自体は少なくないが、最

近の記録はあまりない。森林性の種と比較して生息状況の悪化が深刻な種といえる。

【形態の記載】体長14～25mmと個体変異が大きく、体型は比較的長細い。近似のモンシデムシ類とは斑紋の形状や前胸背板の形態、触角の色彩などで区別する。

【分布の概要】国内では本州、四国、九州に分布。

【生息状況】県内では低地帯から低山帯まで広く分布するが、河川敷とその周辺の湿地・草地環境に産地が限定され、台地・丘陵帯以上の場所ではほとんど見られない。

【生態的特性】平地性の種で河川敷やその周囲の湿地、草

地に生息。大型動物の死骸に依存しており、平野部の動物相が豊かな環境が広範囲で確保されている場所のみ生息する。

【生息地の条件】平地帯～低山帯において、水辺の草地、湿地が広範囲で保存されており、なおかつ動物相が豊かで餌資源に不自由しないこと。

【生存に対する脅威】平野部における河川敷の改修やグラウンド等の造成、湿地の埋め立て等。

〔コウチュウ目 シデムシ科〕

全県カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群

全国カテゴリー -

〔和名〕ヒメモンシデムシ

〔学名〕*Nicrophorus montivagus*

【摘要】本来は亜高山帯に生息するモンシデムシ類で、県内では低山帯で1例報告があるが実際にはそれ以上の標高区分地帯に分布するものと思われる。

【形態の記載】体長10～17mmと比較的小型のモンシデムシ。上翅の斑紋がマエモンシデムシに似ているが、本種は他の種類と違って触角は先端節のみが橙色で特徴的である。

【分布の概要】本州、四国、佐渡ヶ島に分布。

【生息状況】県内では低山帯における三峰山大陽寺（標高600m）でヤマカガシの死体より得られた1頭の記録（吉

越，1996）が唯一である。

【生態的特性】主に亜高山帯以上の山岳地帯に生息し、動物の死骸に依存している。

【生息地の条件】山地帯から亜高山帯にかけて豊かな動物相の保存されている環境があること。

【生存に対する脅威】生息範囲が高所に限られるため、そうした地域での開発や森林伐採は影響を与えると考えられる。また、近年問題となっている鹿による植生の悪化とそれに伴う乾燥化は少なくとも本種にも影響を与えると思われる。

〔コウチュウ目 シデムシ科〕

全県カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群

全国カテゴリー -

〔和名〕ヒメクロシデムシ

〔学名〕*Nicrophorus tenuipes*

【摘要】本来は亜高山帯に生息する種で、県内では秩父地方のみで確認されている。まれに低標高地にも下りてくるようで、山地帯の武甲山等でも得られている。

【形態の記載】体長14～23mmとやや中型で、クロシデムシの体長（最小は25mm程度）と重なることはないが、一見良く似ているので注意が必要である。全身黒色で、前胸背板には十字の溝が明瞭。後脛節はクロシデムシと違って湾曲しない。

【分布の概要】国内では北海道と本州の中部以北の高地にのみ分布。

【生息状況】秩父市橋立の武甲山（8～9月に得られている4頭の標本を確認）と、皆野町門平、秩父市（旧大滝村）内の雲取山と雁坂峠～突出峠において記録があり、今回の調査で十文字峠付近でも確認している。

【生態的特性】主に亜高山帯以上の山岳地帯に生息し、動物の死骸に依存している。

【生息地の条件】山地帯から亜高山帯にかけて豊かな動物相の保存されている環境があること。

【生存に対する脅威】生息範囲が高所に限られるため、そうした地域での開発や森林伐採は影響を与えると考えられる。また、近年問題となっている鹿による植生の悪化とそれに伴う乾燥化は少なくとも本種にも影響を与えると思われる。

【特記事項】低地帯の久喜市青毛と狭山市の本種の記録は垂直分布上ありえないものであり、久喜市の個体については誤りであることが既に判明している。狭山市の記録もクロシデムシの小型個体の誤同定である可能性が極めて高く、本種の記録としては含めないでおく。

〔コウチュウ目 ハネカクシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕ススキクチヒゲアリヅカムシ

〔学名〕*Poroderus similis*

【摘要】ススキ草原的な環境を好む大型のアリヅカムシ。生息地における個体数はさほど多くないようで、一度にたくさん得られることはほとんど無い。ススキの大きな古い株の根元に生息することから、長年にわたりススキ草原が保たれてきた環境があることが重要である。

【形態の記載】複眼が発達し、触角は先端に向かって太くなり、前胸背板基部と上翅端部は鱗片を密生する。小顎類は各節の外縁に突起物を生じる。

【分布の概要】本州、九州に分布。

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
④コウチュウ目  
昆虫類  
クモ類  
甲殻類  
多足類  
軟体動物  
扁形動物

【生息状況】 県内では台地・丘陵帯からのみ記録されており、河川敷や桑園跡、江戸時代の草刈場跡といったススキ草原がある場所に分布する。

【生態的特性】 ススキ草原の大きな株の根際に生息する種で、株になっている部分に溜まった落葉や土の中から見つかることが多い。

【生息地の条件】 ススキがたくさん生える草原が長い年月

にわたり確保されていること。また、定期的に人力による草刈りが行われているとなお望ましい。

【生存に対する脅威】 外来植物の進入や管理不足による荒廃によりススキ草原の植生が変化してしまうこと。宅地開発や河川改修等に伴う草地の消失。大型機械の乗り入れによる踏圧等。

〔コウチュウ目 ハネカクシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕 フジヤマダルマアリヅカムシ 〔学名〕 *Paracyathiger fujiyamai*

【摘要】 熱帯に分布の中心を持つグループの最北端分布種で、県内では県中央から南部にかけて残る照葉樹の森にのみ生息が確認されており、平野部の森林植生の存続が生息に大きく影響するものと考えられる。

【形態の記載】 暗赤褐色で、上翅は肩がなだらかで後翅が退化しており、触角先端は大きく横長の卵型をしている。

【分布の概要】 本州に分布。

【生息状況】 埼玉県ではなぜか照葉樹林に限って分布しており、神社林や尾根沿いに残る照葉樹林に生息する。

【生態的特性】 朽木や落ち葉の中に生息し、衝撃を与えるとしばらく死んだふりをする。

【生息地の条件】 落ち葉や朽木の豊富な、湿度の保たれた照葉樹の森がある程度の面積で残っていること。

【生存に対する脅威】 森林開発。森林の乾燥化。

〔コウチュウ目 ハネカクシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕 ドウバネアナバケハネカクシ 〔学名〕 *Syntomium japonicum*

【摘要】 湿度の極めて高い山の沢沿いにおいて、岩や倒木の表面に厚く苔生した環境においてその苔内に生息する種で、県内ではこうした環境に限られることから、貴重な存在と考えられる。

【形態の記載】 体表面は金属光沢を有する。頭部、前胸背板、上翅には粗い点刻があり、前胸背板は楕円形。腹部は幅広い。

【分布の概要】 本州、四国に分布。

【生息状況】 県内では山地帯の沢沿いで苔相が極めて発達した環境に生息しているものと思われる。このため河川

の上流部に生息地が限られる。現在知られている産地は秩父市安谷川源流の1ヶ所のみ。

【生態的特性】 岩や倒木の表面に厚く苔生した環境においてその苔内に生息する種である。

【生息地の条件】 湿度が高く、苔が厚く覆う場所が広範囲にわたり確保されていること。

【生存に対する脅威】 森林伐採や砂防ダム等の整備により林床の日当たりが良くなり、乾燥化が進むこと。鹿の被害等により沢の源頭部付近の樹木が枯れ、水源における水量が確保できなくなること。

〔コウチュウ目 ハネカクシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕 ナミクシヒゲハネカクシ 〔学名〕 *Velleius dilatatus*

【摘要】 樹液が多く確保される雑木林に生息し、県内では秩父地方から比企地域にかけていくつか産地がある。この仲間はスズメバチやボクトウガの巢中に寄生生活することが知られている。

【形態の記載】 体長15~23mm。大型で頭部、前胸背板は幅広く、強靱な大顎を持ち、触角は櫛髯状。上翅は艶がにぶく、全身黒色で上翅肩部にのみ小さな黄色紋を生じる。

【分布の概要】 国内では北海道と本州に分布。

【生息状況】 台地・丘陵帯の嵐山町菅谷、低山帯の東秩父村二本木峠付近、秩父市久那、秩父市（旧大滝村）川又

とわずかに確認されている。

【生態的特性】 樹液や腐果実に集まる。成虫が良く見られる樹液にはボクトウガの巢があることが多く、本種の幼虫はこの巢中で生活するものと思われる。

【生息地の条件】 樹液が出る木が多く確保される雑木林等の落葉広葉樹林が確保されていること。

【生存に対する脅威】 森林伐採、開発行為。森林の乾燥化。クワガタムシ等を目的とした樹液採集による木へのダメージも、結果として樹液が枯れる原因になることがほとんどであり、本種の生息に影響を及ぼすと考えられる。

〔コウチュウ目 ハネカクシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕 ミドリオオメハネカクシ

〔学名〕 *Quedius multipunctatus*

【摘要】 厚く苔むした沢沿いで、苔の中に生息する美しいハネカクシ。良く飛翔するようで、衝突板トラップ等でも得られる。

【形態の記載】 体長8.5～9mm。頭部、前胸背板、上翅はいずれも金緑色の光沢があり、腹部は光沢を帯びた黒色、触角と脚は赤褐色。

【分布の概要】 本州と四国に分布。

【生息状況】 県内では山地帯の沢沿いで苔相が良く発達した環境に生息している。秩父市の武甲山と熊倉山で記録されているほか、今回の調査で飯能市有間山の東京都と

の県境付近、秩父市の雲取林道や駆ヶ越トンネル、雁坂トンネル手前のわさび沢などで生息を確認している。

【生態的特性】 岩や倒木の表面に厚く苔生した環境においてその苔内に生息する種である。

【生息地の条件】 湿度が高く、苔が厚く覆う場所が広範囲にわたり確保されていること。

【生存に対する脅威】 森林伐採や砂防ダム等の整備により林床の日当たりが良くなり、乾燥化が進むこと。鹿の被害等により沢の源頭部付近の樹木が枯れ、水源における水量が確保できなくなること。

〔コウチュウ目 ハネカクシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕 オオヒョウタンメダカハネカクシ

〔学名〕 *Dianous shibatai*

【摘要】 本州のみに生息する大型のメダカハネカクシ類で、この群は後翅が退化し地理的種分化が認められる。

【形態の記載】 体表面に皺状のみごとな彫刻が見られ、体色はやや緑色の金属光沢を帯びた黒色。

【分布の概要】 本州にのみ分布。

【生息状況】 埼玉県内では両神山の清滝付近にのみ生息が確認されている種で、生息環境から考えても産地は決して多くは無いと考えられる。

【生態的特性】 巨大な岩盤がむき出しの岩場、豊富な水と苔、それらが育む自然林に囲まれ日の届きにくい場所といった条件で生息している。岩の壁面から水が滴り落ち、

厚く苔むしたような環境で、苔の下や岩の亀裂の隙間などに潜っており、日の当たるところにはあまり出てこない。

【生息地の条件】 水資源に恵まれた岩場環境。苔に被われる環境が好適で、沢の源頭部などに生息する。

【生存に対する脅威】 乾燥化。日当たりの変化。県内唯一の生息地が登山道沿いであり、観光客の増加やそれに伴う道の整備が脅威と考えられる。

【特記事項】 全国的にも比較的稀な種で、生息環境が新たに増える要因がほとんど無いことから、生息地の現状保存が望まれる。

〔コウチュウ目 クワガタムシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕 ミヤマツヤハダクワガタ

〔学名〕 *Ceruchus lignarius monticola*

【摘要】 本種はツヤハダクワガタ亜科の中で知られる唯一の日本産種で、埼玉県に生息する個体群はいわゆるミヤマツヤハダクワガタとされているが、これまで検した個体は亜種を特徴付ける大顎基部の内歯の位置はどちらかというところと原名亜種に近い形質を示している。

【形態の記載】 体型は筒状で朽木内部の生活に適応しており、体表面はつやがあり和名の由来となっている。♂は頭部が大きく、大顎は基部に内歯を持ち、複眼後方には溝が多数ある。♀は頭部が小さく、大顎も短い。♀♂とも上翅の縦状は明瞭。

【分布の概要】 本種は日本固有種で、北海道から関東以北に分布する原名亜種（ツヤハダクワガタ）と関東南西部から中部、近畿にかけて分布する亜種（ミヤマツヤハダ

クワガタ）、四国から九州に分布する亜種（ミナミツヤハダクワガタ）の3亜種に分類されている。

【生息状況】 埼玉県では秩父市（旧大滝村）で2例報告があるほか、飯能市（旧名栗村）でも生息が確認され、産地はいずれも標高が1,000m以上の山地帯である。

【生態的特性】 本種の幼虫は褐色腐朽菌による朽木を餌とするため、赤腐れの朽木が安定的に確保されている尾根沿いの自然林を中心に分布しているものと思われる。

【生息地の条件】 赤腐れの朽木が安定的かつ豊富に存在する湿度の高い自然林があること。大木のある森であればなお理想的である。

【生存に対する脅威】 林道整備や林地開発による森林の乾燥化。過度の採集圧による良好な赤腐れ朽木の減少。

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

④ コウチュウ目 昆虫類

クモ類

甲殻類

多足類

軟体動物

扁形動物



〔コウチュウ目 クワガタムシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕 マダラクワガタ

〔学名〕 *Aesalus asiaticus asiaticus*

【摘要】 山地の広葉樹林内で朽木中に生息する小さなクワガタムシ。成虫として活動するまで2年を要する。

【形態の記載】 体長4～6mmと超小型のクワガタムシ。丸く、厚みがあり、上翅表面には黒色の毛塊が列状に生え、体色は暗褐色。

【分布の概要】 北海道から九州までと伊豆諸島御蔵島、九州の対馬と屋久島にそれぞれ分布。

【生息状況】 県内では山地帯～亜高山帯にかけて生息。秩父市の熊倉山と霧藻ヶ峰から記録がある他、同市天目山

林道、三峰山の駆ヶ越トンネルからそれぞれ確認している。

【生態的特性】 山地の原生林やそれに近い落葉広葉樹林において、湿った林床に転がる朽ち木中に生息する。成虫として活動するまで2年を要するとされる。

【生息地の条件】 山地において、朽ち木の豊富な、湿潤な林床がある落葉広葉樹林が確保されていること。

【生存に対する脅威】 森林の大規模伐採、開発行為、乾燥化。

〔コウチュウ目 クワガタムシ科〕

全県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類

全国カテゴリー -

〔和名〕 ネブトクワガタ

〔学名〕 *Aegus laevicollis subnitidus*

【摘要】 大顎基部が太くなる小型のクワガタムシ。針葉樹の樹液にも集まる変わり者で、関東地方の内陸では埼玉県中部地域がほぼ分布北限となるようである。このため県内でも記録が少ない種である。

【形態の記載】 体長11～22mm、大顎2～6mm。黒褐色～黒色で上翅の溝は明瞭。♂の大顎は長く、基部に歯がある。

【分布の概要】 本亜種は本州の太平洋側は関東南部以南、日本海側は山形県以南の地域から九州までと佐渡ヶ島、隠岐諸島、伊豆諸島、対馬、屋久島、トカラ列島に分布

している。

【生息状況】 台地・丘陵帯の鳩山町や毛呂山町箕和田、飯能市天覧山、同市朝日山、低山帯の寄居町、山地帯の秩父市（旧大滝村）白岩山付近にかけて記録されている。

【生態的特性】 広葉樹やモミなどの針葉樹の樹液に集まる。

【生息地の条件】 森林環境が保存管理されており、樹液が出る木が豊富であること。

【生存に対する脅威】 宅地開発等による大規模な森林伐採、森林の乾燥化、管理不行届により荒れてしまうなど、樹液や幼虫の生息可能な朽ち木の確保が難しくなること。

〔コウチュウ目 クワガタムシ科〕

全県カテゴリー 絶滅危惧ⅠA類

全国カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類

〔和名〕 オオクワガタ

〔学名〕 *Dorcus hopei*

【摘要】 大型のクワガタムシで、広葉樹の大木にできた洞を棲みかとするため生息密度は低い。

【形態の記載】 ♂は大顎を含めると体長80mmを超え、頭部、前胸背板は幅広く発達する。♂大顎の内側中央には1本の歯がある。♀の大顎は発達せず、頭部の幅も♂に比べて狭い。

【分布の概要】 国内では北海道から九州、対馬まで分布。

【生息状況】 台地・丘陵帯から秩父地方の低山帯にかけて記録されているが近年の記録はない。

【生態的特性】 クヌギやブナなど落葉広葉樹の大木にできた洞を棲みかとし、夜行性で灯火にも飛来する。もともとの個体密度が低く、生息環境も限定されることから、発見が困難な種である。

【生息地の条件】 洞のあるクヌギやブナなどの大木が確保されている森林環境があること。

【生存に対する脅威】 大木の伐採。周囲の森林における大規模な伐採。ただし、雑木林では伐採更新が不可欠なことから、大木以外の部分的な伐採を継続する必要がある。また、近年のクワガタムシブームに起因する乱獲、さらに捕獲の際に行われるナタや手オノを用いた樹木へのダメージは生息環境の乾燥化や樹木の枯死など深刻な影響を与える。

【特記事項】 外国産クワガタムシの生き虫輸入と一般への飼育機会の増加に伴い、飼育出来なくなった個体が放たれ、野外で見つかるケースが増えており、中には他県でオオクワガタを見つけるために洞を確認したところ大型の外国産クワガタムシが得られたという情報もある。こうした外国産種の放虫行為は本種等在来の希少なクワガタムシの生息にも少なからず影響があるだろう。

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

昆虫類

④コウチュウ目

クモ類

甲殻類

多足類

軟体動物

扁形動物

〔コウチュウ目 クワガタムシ科〕

【全県カテゴリー】 準絶滅危惧

【全国カテゴリー】 -

〔和名〕 オオルリクワガタ

〔学名〕 *Platycerus delicatulus delicatulus*

【摘要】 早春の原生林で活動する小さなクワガタムシ。ブナ林を好むため、ブナの原生林の分布に限られる秩父山地では発見も容易ではなく、記録もほとんどないのが現状である。

【形態の記載】 体長9～12mm、♂は緑色味を帯びた青藍色の金属光沢で、♀は金銅色である。♀♂とも大顎は発達せず、♂の大顎には基部に長く突出する歯がある。

【分布の概要】 基亜種は本州、四国、九州の山地に分布する。また、九州北西部の島原半島には別亜種のウンゼンオオルリクワガタ *P. d. unzendakensis* が分布する (IMURA, 2007)。

【生息状況】 亜高山帯からのみ記録されている。本種が好むミズナラやブナの林は本来山地帯のものであり、こうした地域での調査が不足しているものと思われる。

【生態的特性】 早春、芽吹きの際にミズナラやブナの枯れ木上で観察される。コルリクワガタのように新芽に集まることは稀である。

【生息地の条件】 山地帯や亜高山帯においてミズナラ、ブナなどの豊富な自然林が広範囲に残されていること。

【生存に対する脅威】 自然林の伐採。鹿の食害や酸性雨などの影響による森林の荒廃。

〔コウチュウ目 クワガタムシ科〕

【全県カテゴリー】 準絶滅危惧

【全国カテゴリー】 -

〔和名〕 ホソツヤルリクワガタ

〔学名〕 *Platycerus kawadai*

【摘要】 ルリクワガタ同様、早春の原生林で活動する小さなクワガタムシ。ブナ帯以上の山岳地帯に生息するため発見は容易でない。

【形態の記載】 体長8～12mm、ルリクワガタに似るが前胸背板後角は多少とも角ばり、♂の大顎外側基部が大きく湾入することで区別できる。

【分布の概要】 本州の富士山周辺と関東山地から南アルプス、長野県中部などの山岳地帯に分布。

【生息状況】 秩父地方の山地帯からのみ記録があり、秩父

市 (旧大滝村) の三峰山霧藻ヶ峰と中津川林道から報告されている。

【生態的特性】 ブナ帯以上を生息の場とし、春先の芽吹きの際に成虫が観察される。

【生息地の条件】 山地帯や亜高山帯においてミズナラ、ブナなどの豊富な自然林が広範囲に残されていること。

【生存に対する脅威】 自然林の伐採。鹿の食害や酸性雨などの影響による森林の荒廃。

〔コウチュウ目 クワガタムシ科〕

【全県カテゴリー】 情報不足

【全国カテゴリー】 -

〔和名〕 マグソクワガタ

〔学名〕 *Nicagus japonicus*

【摘要】 山地の河原において、主に砂地を生息の場とする特殊な生態のクワガタムシ。奥秩父で最近になって1例報告があり、今後の分布調査が期待される。

【形態の記載】 体長8～9.5mm。♂は褐色で、♀はやや明るい体色である。クワガタムシと言っても大顎は発達せず、以前はコブスジコガネ科に含まれていたこともある。

【分布の概要】 北海道、本州に分布する。

【生息状況】 荒川源流の中津川において、1ヶ所生息地が確認された。奥秩父の河川には本種が好む砂地の河原はほとんど無いことから、生息状況はかなり限定されるものと

と考えられる。

【生態的特性】 やや開けた砂地の河原で、半分埋没したような流木がたくさんある場所を生息の場とし、春先にその付近を日中飛び回るのが観察できる。

【生息地の条件】 山地の河川沿いで砂地の場所が広範囲に保存され、なおかつ幼虫の成育に適した埋没気味の流木が多くあること。

【生存に対する脅威】 河川改修等の環境改変、マニア等による乱獲。

〔コウチュウ目 アカマダラセンチコガネ科〕

【全県カテゴリー】 情報不足

【全国カテゴリー】 -

〔和名〕 アカマダラセンチコガネ

〔学名〕 *Ochodaes maculatus maculatus*

【摘要】 林縁などで低い場所をすばやく飛び回る小型の糞虫。原生林など良好な森林環境を好んで生息することが知られるが、詳しい生態は解明されていない。最近まで記録自体も限られていたが、トラップ技術の進歩により急速に捕獲事例が増えた。今後の調査により生息状況が

明らかになるであろう。

【形態の記載】 体長6.4～11mm。丸く、黒色で、前胸背板側縁、上翅の大部分、中、後脚腿節と触角端部は黄白色。全身長毛に覆われる。

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

④コウチュウ目

昆虫類

クモ類

甲殻類

多足類

軟体動物

扁形動物

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
④コウチュウ目  
昆虫類  
クモ類  
甲殻類  
多足類  
軟体動物  
扁形動物

〔分布の概要〕 本州、四国、九州に分布。  
 〔生息状況〕 寄居町と秩父市大滝の2ヶ所で確認されている。  
 〔生態的特性〕 春から晩秋にかけて、日中、特に夕方近くになると林内や林縁の草地などでハエのようにすばやく飛び回る。また、芝地など開けた場所で小さな土盛りを

形成し、その下に成虫が潜んでいることもある。  
 〔生息地の条件〕 本種の生息に適した森林環境が保存されていること。  
 〔生存に対する脅威〕 生息地における森林伐採、乾燥化など。

〔コウチュウ目 コガネムシ科〕 **全県カテゴリー** 絶滅危惧ⅠA類 **全国カテゴリー** 絶滅危惧Ⅱ類  
 〔和名〕 **ダイコクコガネ** 〔学名〕 *Copris ochus*

〔摘要〕 日本産の糞虫では最大の種。大きな角が特徴で、かつては放牧地の牛の糞に多く見られたようだが現在では各地で減少し、環境省の2007年版レッドリストでもVUに位置づけられている。県内での記録は僅か2例で、近年の記録がないことからより危険度の高いランクに位置づけた。  
 〔形態の記載〕 丸みを帯びた体型で、背が高く、色彩は黒色。♂には長い角があり、前胸背板にも1対の突起がある。前胸前縁角は前方に鋭く角張る。  
 〔分布の概要〕 北海道から九州までと佐渡ヶ島、伊豆諸島、

壱岐島、口永良部島に分布。  
 〔生息状況〕 県内では皆野町の秩父高原牧場と秩父市（旧大滝村）の上中野の低山帯からの報告のみで、最近の報告が全くない。  
 〔生態的特性〕 牛や鹿などの糞に集まり、地中深くに坑道を掘る。夜間の灯火にも飛来する。  
 〔生息地の条件〕 牛や鹿の糞が安定的に確保されていること。  
 〔生存に対する脅威〕 牛の糞の軟便化、飼育頭数の減少など。

〔コウチュウ目 コガネムシ科〕 **全県カテゴリー** 準絶滅危惧 **全国カテゴリー** -  
 〔和名〕 **オオキイロコガネ** 〔学名〕 *Pollaplonyx flavidus*

〔摘要〕 平野部の雑木林や河川林等で良好な状態の林に生息する中型のコガネムシ。既知産地における数回にわたる調査でも追加個体が確認できないことから、より危険度の高いランクへ変更した。  
 〔形態の記載〕 体長は16~20mm、全体が黄褐色で脚は長く、頭部前縁は中央が著しくくぼむ。♂の尾節板は中央部が隆起する。  
 〔分布の概要〕 本州、四国、九州に分布。  
 〔生息状況〕 低地帯でのみ記録されている。局所的な分布を示し、都心に近い産地では産地自体が消滅の危機にさ

らされているものと考えられる。最近の確実な記録は無いようである。  
 〔生態的特性〕 5~6月のごく短い間に出現し、夕暮れ時に一度に大量の個体が群飛する。発生期間が短く、発見が困難である。良好な林に生息すると思われるが詳しい条件はわからない。  
 〔生息地の条件〕 平野部の雑木林や河川林が荒廃せずに良好な状態で維持されていること。  
 〔生存に対する脅威〕 一度に広範囲の面積を伐採するような森林伐採、開発による森林の消滅等。

〔コウチュウ目 コガネムシ科〕 **全県カテゴリー** 準絶滅危惧 **全国カテゴリー** 情報不足  
 〔和名〕 **アカマダラハナムグリ** 〔学名〕 *Anthracophora rusticola*

〔摘要〕 ワシタカ類の巣に依存すると考えられているハナムグリで、アカマダラコガネの和名で親しまれてきたが、最近では上記の和名が用いられている。成虫は樹液に集まる。  
 〔形態の記載〕 体長15~21.6mm。前胸背板上と翅は艶が無く、赤味がかかった黄褐色と黒色の斑模様で、腹面は黒色。  
 〔分布の概要〕 国内では北海道から九州、五島列島、屋久島まで分布。  
 〔生息状況〕 低地帯と台地・丘陵帯、低山帯から記録がある。

〔生態的特性〕 成虫は夏から秋にかけて樹液に集まる姿が観察され、最近になって幼虫やサナギがワシタカ類の巣から多数発見されており、生態的にこれらの鳥類の生息が大きく影響しているものと思われる。  
 〔生息地の条件〕 オオタカなどのワシタカ類が営巣し、なおかつ成虫の餌となる樹液の豊富な雑木林が存在すること。  
 〔生存に対する脅威〕 雑木林の減少。ワシタカ類の営巣地の減少。

〔コウチュウ目 コガネムシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー 準絶滅危惧

〔和名〕 オオチャイロハナムグリ 〔学名〕 *Osmoderma opicum*

【摘要】 山地の大木の洞に依存する大型のハナムグリ。幼虫は洞の腐植土中で生活し、♂成虫は麝香臭の香気を発する。

【形態の記載】 体長22～32mmと大型、光沢のある黒褐色で、背面は紫銅色を帯びる。♂の前胸背板中央に2縦隆条があり、強く稜状となる。

【分布の概要】 本州、四国、九州、屋久島に分布。

【生息状況】 山地帯から亜高山帯にかけて分布し、秩父市の雁坂峠や雲取山周辺、三峰山、中津川などでわずかに

記録がある。

【生態的特性】 成虫の発生期は7～8月で、発生木の近くでは梢の上の高い場所を飛ぶ姿が見られる。また、洞の周囲には♂成虫が発する麝香の香りが漂う。生息には巨木の洞があることが必須。

【生息地の条件】 洞のある巨木が多数存在する森があること。

【生存に対する脅威】 巨木の伐採、巨木の枯死、森の伐採等。

〔コウチュウ目 コガネムシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕 トラハナムグリ 〔学名〕 *Trichius japonicus*

【摘要】 低地から山地に生息するハナムグリ。県内では僅か2例のみ記録があるが、いずれも平野部のものであり、その後追加記録もなく県内の生息状況は確実に悪化しているものと思われる。

【形態の記載】 体長12.7～16mm。黒色で、上翅は黄褐色で艶を欠き、側縁に3対の黒色紋を持つが個体変異があり中央の紋と翅端の紋が癒合するものもいる。頭部、前胸背板、腹端ならびに体下面は長い黄褐色の毛に覆われ、脚は細長い。尾節板は基部が白黄色。

【分布の概要】 北海道から九州まで分布。

【生息状況】 県内では台地・丘陵帯の日高市と平地帯の鳩

ヶ谷市からそれぞれ1例ずつ報告があるのみ。いずれの産地も詳細は記されておらず、その後既知産地での新たな報告や新産地の追加は無いことから考えて、県内での生息状況は危機的であると思われる。

【生態的特性】 初夏から夏にかけて、低地から山地の森林環境周辺でアザミヤノリウツギ、シシウドなどの花に集まる。

【生息地の条件】 低地から山地にかけて、雑木林などの森林環境とその周辺にアザミヤノリウツギ、シシウドなどの生える草地があること。

【生存に対する脅威】 里山環境の開発。

〔コウチュウ目 タマムシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕 ウバタマムシ 〔学名〕 *Chalcophora japonica japonica*

【摘要】 アカマツ等のマツ類に依存するが、アカマツ林の衰退に伴い、近年の報告例が減ってきている。まだ県内では確実な産地があるが、植生の変化に伴い今後ますます減少することが予想される。

【形態の記載】 体長24～40mmと大型のタマムシで、全身赤銅色で表面は皺状を呈し、黄灰色粉で薄く覆われ、前胸背板ならびに上翅には光沢のある隆条がある。翅端付近は鋸状となる。

【分布の概要】 国内では本州から琉球列島まで広く分布し、南方ではいくつかの亜種に分かれる。小笠原諸島と南大東島にも生息するが、これは本土からの移入による。

【生息状況】 低地帯から山地帯にかけて多くの記録があり、かつては極普通に見られた種である。しかしながら昭和期におこった大量のアカマツの立ち枯れなどが影響し、

近年では生息地が減少している。台地・丘陵帯では近年でもいくつかの場所で生息が確認されており、今後の生息状況はアカマツ林の存続次第といえよう。

【生態的特性】 アカマツなどマツ類の枯木や衰弱木につき、幼虫は材の内部を喰い進む。

【生息地の条件】 健全なアカマツ林が広範囲で存続していること。ただし、マツノザイセンチュウ対策による大量の薬剤散布が実施される林ではむしろ生息は困難と思われる。

【生存に対する脅威】 アカマツ林の大規模な伐採、植生の遷移やマツノザイセンチュウの影響によるアカマツ林の消失。マツノザイセンチュウ対策によるアカマツ林への薬剤散布等。

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

④コウチュウ目

昆虫類

クモ類

甲殻類

多足類

軟体動物

扁形動物

哺乳類	[コウチュウ目 タマムシ科] <b>全県カテゴリ</b> 準絶滅危惧 <b>全国カテゴリ</b> -
鳥類	[和名] <b>アオマダラタマムシ</b> [学名] <i>Nipponobuprestis amabilis</i>
爬虫類	<p><b>【摘要】</b> 美しいタマムシの一種で、埼玉県は生息の北限近くに位置することから個体数も少なく全体として稀である。今後温暖化に伴い生息状況がどのように変化するか興味を惹くところである。</p> <p><b>【形態の記載】</b> 体長16~30mmの中型タマムシ。体表面は金緑色の金属光沢で、赤味を帯びることもある。上翅には4個の黄色陥没紋があり、さらに細かい黄色紋を周辺に散布する。</p> <p><b>【分布の概要】</b> 関東以西の本州、四国、九州、対馬に分布。</p> <p><b>【生息状況】</b> 県内では低地帯と台地・丘陵帯から確認されている。低地帯ではさいたま市（旧大宮市）や北本市、熊谷市（旧江南町）から最近でも確認されており、台地・丘陵帯でも寄居町のほか、今回の調査で嵐山町から生息が確認されている。</p> <p><b>【生態的特性】</b> 幼虫はサクラ、ツゲ、アオハダ、オガタマノキなどの樹木内で生育する。初夏に発生し、発生木周辺では多数の個体が一度に確認されることもある。</p> <p><b>【生息地の条件】</b> 低地など暖かな場所で、広葉樹の森が保たれていること。</p> <p><b>【生存に対する脅威】</b> 大規模な伐採。開発行為。</p> <p><b>【特記事項】</b> 嵐山町で確認された個体のデータ：1頭、2007年8月25日、嵐山町越畑地内。</p>
両生類	[コウチュウ目 タマムシ科] <b>全県カテゴリ</b> 情報不足 <b>全国カテゴリ</b> -
魚類・円口類	[和名] <b>キンヘリタマムシ</b> [学名] <i>Poecilonota pretiosa bellula</i>
④コウチュウ目	<p><b>【摘要】</b> ハルニレに依存する美麗タマムシ。県下では平地の1例のみで、分布の詳細は不明。</p> <p><b>【形態の記載】</b> 体長8~13mm。</p> <p><b>【分布の概要】</b> 国内では北海道から四国に分布。九州には別亜種が産する。</p> <p><b>【生息状況】</b> 低地帯の川島町白井沼からの古い記録が1例あるが、詳細は不明。ハルニレは本州では山地に生育する樹で、自然分布ではこのあたりにハルニレは生育していない。しかしながらこの樹は街路樹や公園などに植栽されることも多く、川島町の例はあるいはそうしたものについてきた等の偶産の可能性もある。ハルニレ自体は奥秩父に自然分布していることから、この地域における調査成果が期待されることである。</p> <p><b>【生態的特性】</b> 梅雨から夏季にかけてハルニレの枯れ枝や伐採木に集まる。</p> <p><b>【生息地の条件】</b> ハルニレを含む林があること。</p> <p><b>【生存に対する脅威】</b> ハルニレ林の衰退。</p>
クモ類	[コウチュウ目 タマムシ科] <b>全県カテゴリ</b> 準絶滅危惧 <b>全国カテゴリ</b> -
甲殻類	[和名] <b>エサキキンヘリタマムシ</b> [学名] <i>Poecilonota kamikochiana</i>
多足類	<p><b>【摘要】</b> 秩父市（旧大滝村）から1例のみ知られている。ハンノキ類につくため決して産地は少なくはないと思われるが、分布上、産地は秩父地方の高所に限定される。</p> <p><b>【形態の記載】</b> 体長9~16mm。体型は細長くやや幅広で、背面は緑色の金属光沢を帯び皺状で、側縁には金橙色部がある。個体によっては金橙色となる。上翅と前胸背板には細かな黒藍色紋を生じる。</p> <p><b>【分布の概要】</b> 北海道と本州の高地に分布。</p> <p><b>【生息状況】</b> 山地帯の秩父市（旧大滝村）地内より記録されている。</p> <p><b>【生態的特性】</b> ミヤマハンノキやヤマハンノキ、ミネヤナギなどにつき、初夏から夏季に発生する。</p> <p><b>【生息地の条件】</b> 山地の沢沿いや尾根沿いにおいて、ハンノキ類が旺盛に生えていること。</p> <p><b>【生存に対する脅威】</b> ハンノキ類の大規模な伐採。</p>
軟体動物	[コウチュウ目 ヒメドロムシ科] <b>全県カテゴリ</b> 準絶滅危惧 <b>全国カテゴリ</b> 準絶滅危惧
扁形動物	[和名] <b>ケスジドロムシ</b> [学名] <i>Pseudamophilus japonicus</i>
	<p><b>【摘要】</b> 大きな河川の清流にすむヒメドロムシの大型種。県下の記録は久喜市の古い1例のみで、その後確認されていない。</p> <p><b>【形態の記載】</b> 体長4.8~5.3mm。長細く、脚も長い。全体暗褐色で、上翅には奇数間室に黄色の毛を列生する。</p> <p><b>【分布の概要】</b> 本州にのみ分布。</p> <p><b>【生息状況】</b> 県下では低地帯から1例のみ、埼玉県動物誌に久喜市野久喜の記録が見られる。おそらくは同地内を流れる青毛堀悪水路からの記録と思われるが、詳細は不明である。市街地に隣接して開発の影響を大きく受けている地域であり、現在も生息しているかは不明。周囲には大小様々な河川が多く、現在でも良好な環境を保っている河川も見受けられることから、調査によっては再確認できる可能性もある。</p>



【生態的特性】 平野部の比較的大きな流れの清流に生息する。

【生息地の条件】 平野部において、護岸等の影響が少ない

水質の良好な清流が残されていること。

【生存に対する脅威】 河川改修、水質汚濁。

〔コウチュウ目 ドロムシ科〕

【全県カテゴリ】 準絶滅危惧

【全国カテゴリ】 -

〔和名〕 ムナビロツヤドロムシ

〔学名〕 *Elmomorphus brevicornis*

【摘要】 丘陵地の細流に生息する種で、環境アセスメントの資料も含め県下ではいくつか記録があるが、いずれの産地も周囲の開発により危険にさらされている。

【形態の記載】 体長3.6~3.9mm。長細く、丸みを帯びた形態で、脚は長い。体色は暗褐色~黒色。

【分布の概要】 本州、九州、琉球に分布。

【生息状況】 台地・丘陵帯からのみわずかな記録がある。記録地はいずれも丘陵地の端部に位置する谷津田の用水路など、昔ながらの里山環境で、現在ではゴルフ場や産業廃棄物処理場が隣接し、生息地自体が危機的な状況である。

【生態的特性】 清流に生息する種とされるが、埼玉県内で

はむしろ湧水起源の細流に生息すると言った方が適切であろう。流水中に生息し、流路の水中に伸ばした植物の根などにしがみ付いているようで、そうした場所を掬うことで発見できる。

【生息地の条件】 丘陵地の谷津田などで耕地の改修が行われておらず、昔ながらの素掘りの用水路のような細流が残されており、水質、水量が年間を通して安定していること。周囲の水田などで除草剤や殺虫剤の使用がほとんど行われていないこと。

【生存に対する脅威】 耕地整備に伴う水路の護岸改修、農薬類の流入、周囲の開発など。

〔コウチュウ目 ヒラタドロムシ科〕

【全県カテゴリ】 準絶滅危惧

【全国カテゴリ】 -

〔和名〕 マスダチビヒラタドロムシ

〔学名〕 *Psephenoides japonicus*

【摘要】 清流にすむ小型のヒラタドロムシ。♂の細長い触角が特徴で、清流の流れの中で水面に顔を出した岩の表面に触角をゆらゆらとなびかせながらしがみ付く姿は印象的である。

【形態の記載】 体長2~2.4mm。♂の触角は非常に長く、各節より分枝を生じる。♀ではさほど長くない。体色は淡褐色で、鞘翅もやわらかく、全体的に弱々しい印象の虫である。

【分布の概要】 本州、四国、九州に分布。

【生息状況】 県内では台地・丘陵帯からのみ確認され、嵐山町の都幾川流域から既に記録があり、他に今回の調査で同町内の市野川流域と長瀬町の荒川流域からもわずかに確認している。秩父地域には広く分布するものと思わ

れるが、現在のところ調査が進んでいない。

【生態的特性】 清流の流れがせせらぎ状となる場所で、水面に顔を出した岩の水しぶきがかかる場所に静止する個体が良く観察される。また、水際から水中に根を伸ばした植物にもしがみ付いていることがあり、水中を掬うと得られることもある。発生時期は6月頃が個体数も多く、夜間の灯火にも飛来する。幼虫は水生昆虫で、水中の石の表面にしがみついで生活する。

【生息地の条件】 清流でせせらぎのある場所に岩が点在していること。水質が良好で、溶存酸素が豊富であること。

【生存に対する脅威】 水質悪化、河川の河床をさらうような改修工事等。

〔コウチュウ目 ホタル科〕

【全県カテゴリ】 絶滅危惧Ⅱ類

【全国カテゴリ】 -

〔和名〕 ヒメボタル

〔学名〕 *Hotaria parvula*

【摘要】 小型のホタルで、♂のみ飛ぶことが出来る。生息地で最近の確認情報がなく、また産地が局所的であることから考えて県内での生息は危機的な状況であると思われる。

【形態の記載】 体長6~9mm。前胸は淡い赤色で背部前縁から中央にかけて三角形の黒色紋がある。♂は飛翔能力があるが、♀は後翅が退化し飛ぶことが出来ない。

【分布の概要】 本州、四国、九州、屋久島。

【生息状況】 山地帯では両神山で、台地・丘陵帯では越生町と坂戸市でいずれも局所的に生息が確認されている。

【生態的特性】 ♂は深夜に群飛する。4月から8月にかけて出現するが、地域ごとの発生時期は短期間である。幼虫は陸上生で、湿った草地に生息するオカチョウジガイやウスカワマイマイなどの陸生貝類を捕食する。

【生息地の条件】 湿った草地で陸生貝類が豊富な場所があり、なおかつ付近に人工的な光源が一切ないこと。

【生存に対する脅威】 草地の埋め立て、乾燥化、街灯や自動販売機、信号機などの周囲への設置。

〔コウチュウ目 ホタル科〕

全県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類

全国カテゴリー -

〔和名〕 ゲンジボタル

〔学名〕 *Luciola cruciata*

【摘要】 大型のホタル。幼虫は流水中に生息し、かつては河川や田んぼ周辺でふつうに見られた種である。水田への農薬散布や用水路の護岸工事、人工的な光源の増加により各地で生息地が減少し、市街地とその周辺ではほぼ絶滅してしまった。

【形態の記載】 体長12～20mm。♀の方が一般的に大型である。細長く、全身黒色で、前胸背板は淡赤桃色で中央に黒色の十字紋がある。腹部腹面の淡部には発光器があり、♂は5、6節目が、♀は5節目が薄黄色となる。

【分布の概要】 本州、四国、九州に分布。

【生息状況】 低地帯から山地帯まで広く生息し、秩父地方を中心に県西部の狭山、加治、高麗、比企など丘陵地にも産地が多いが、発生地はいずれも局所的で個体数が少ない場合がほとんどであり、産地自体も開発等に伴い年々減少する傾向にある。平地での産地は見沼代用水（県指定天然記念物）が有名であったが、水質の悪化等により絶滅した。

【生態的特性】 年1化で、5月下旬から6月下旬にかけて成虫が出現。成虫は発光器によるコミュニケーションをとり、♀は水辺の葉上などに止まったままほとんど動かず、♂は活発に飛翔する。この時に集団明滅という発光パターンを示すが、フォッサマグナを境として東側では4秒間隔、西側では2秒間隔により発光する。幼虫は水生で、流水中に生息し、カワニナ等の水生巻貝類を捕食する。

カワニナが高密度で生息する環境では個体数も多い。越冬は熟令幼虫の段階で、水中の石下などで行われ、産卵は岸辺の苔に、蛹化は岸辺の土中において行われる。

【生息地の条件】 幼虫の生息条件として、水温が15℃から20℃で、酸素を多く必要とすることから流速があり川底に石など水中へ酸素が溶けやすくなる障害物が多いことが重要である。また産卵に必要な岸辺の湿った苔と、蛹化のための土が露出した岸辺も重要である。幼虫の餌となるカワニナ等の水生巻貝類の密度も重要で、水質が安定していることも条件となる。成虫の発生から見ると、周囲に人工的な光源が一切無いこと、水辺に静止できる草木が生えていることも重要である。

【生存に対する脅威】 河川や用水路の護岸。人工的な光源の付近への設置。水質汚濁。さらには成虫の乱獲なども個体群維持にとって重要な脅威となる。また、別地域からの個体群を放虫する行為は地域個体群の遺伝的純粋を汚染する原因となる。

【特記事項】 近年、養殖技術の普及により各地でホタル祭りやホタルをシンボルとした保護活動と称するイベントが行われているが、これらの中には別地域産の飼育個体を放虫する事例も確認されている。これらはホタルの生息しない場所だけでなく、既知産地でも行われており、こうした事例が増えると結果的に純粋な産地の減少を加速する要因となる。

〔コウチュウ目 ホタル科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕 ヘイケボタル

〔学名〕 *Luciola lateralis*

【摘要】 小型のホタル。幼虫は止水域に生息し、ゲンジボタルと同様にかつてはごく普通に見られた種である。産地における個体数が多いが、局所的な発生をしており、産地における生息条件の悪化はただちに個体群の消滅につながる可能性が高い。また、近年のホタルブームにより各地で別個体群の放虫が行われていることが明らかとなり、自然分布による個体群は実際の記録に比べより少ないことから、危険度の高いランクに変更した。

【形態の記載】 体長7～10mm。全身黒色、前項背板は淡赤桃色で中央に黒色の縦帯状紋がある。腹端部にはゲンジボタルと同様の発光器がある。

【分布の概要】 北海道から九州まで分布。

【生息状況】 低地帯から山地帯にかけて生息し、休耕田の増加で一時期は増加傾向にあったものの、耕地整備による乾田化や溜池の改修、農地の転用による開発などで産地が激減し、さらには生息地周辺への人工的な光源の設置も産地減少に拍車をかけている。県内の生息地のうち平野部のかなりの場所が別産地の個体を養殖したものを放虫している事実が調査の結果明らかとなり、記録に比

較して実際の生息地はかなり少ないようである。

【生態的特性】 成虫の発生時期はゲンジボタルよりもやや遅く、6月下旬から8月下旬。幼虫は止水域の浅い場所に生息し、ヒメタニシやヒメモノアラガイなど小型の水生巻貝類を捕食している。成虫は発光器によるコミュニケーションをとり、短い間隔の光を連続的に発光する。ヨシ原や田んぼ周辺で飛翔し、遠くへ離れることはあまりない。

【生息地の条件】 水質、水量が安定した止水域が確保され、幼虫の餌となる小型の水生巻貝類が多く生息していることが重要。また周囲に人工的な光源が一切無いことも生息の条件となる。さらに農薬等の毒物に対する抵抗性が低いことから、こうしたもの水質への影響が無いことも重要。水辺は産卵や蛹化の場所であり、この部分がコンクリート等で護岸されていないことも必須条件である。

【生存に対する脅威】 耕地整備や溜池改修に伴う水辺の改変。人工光源の設置、水質汚濁、成虫の乱獲も脅威である。また、別地域からの個体群を放虫する行為は地域個体群の遺伝的純粋を汚染する原因となる。

【特記事項】近年、養殖技術の普及により各地でホタル祭りやホタルをシンボルとした保護活動と称するイベントが行われているが、これらの中には異地域からの個体群を放虫する事例も確認されている。これらはホタルの生

息しない場所だけでなく、既知産地でも行われ、県内での生息地のうちいくつかは放虫が行われており、こうした事例が増えると結果的に純粋な産地の減少を加速する要因となる。

〔コウチュウ目 ホタル科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕スジグロボタル

〔学名〕*Pristolycus sagulatus*

【摘要】上翅が赤色で黒い隆条を持つ顕著なホタル。幼虫期にカワニナを食べる種のように、県内の記録は狭山丘陵から飯能周辺に限定され、記録自体も少ない。

【形態の記載】体長7～9.1mm。黒色で上翅など部分的に赤色となり、上翅には黒色の3隆条がある。

【分布の概要】北海道、本州、九州に分布。奄美大島には別亜種が分布し、四国には別種のシコクスジグロボタルが生息する。

【生息状況】台地・丘陵帯の所沢市三ヶ島、飯能市天覧山、

狭山丘陵（詳細不明）といった県南部のごく限られた地域からのみ生息が確認されている。県中央部でも生息するものと思われるが、いまのところ確認情報はない。

【生態的特性】幼虫はカワニナを捕食するものと思われ、成虫も谷津の水路周辺で確認されている。

【生息地の条件】カワニナの生息する細流と、それを取り囲む谷津環境があること。

【生存に対する脅威】谷津環境の乾燥化、水質汚濁、埋め立てによる開発等。

〔コウチュウ目 ジョウカイボン科〕

全県カテゴリー 絶滅危惧 I B類

全国カテゴリー -

〔和名〕キイロジョウカイ

〔学名〕*Themus niisatoi*

【摘要】関東とその周辺から近年発見された大型のジョウカイボンで、分布は関東近辺の丘陵地の湿地環境に限られる。幼虫は流水のある谷津の湿地に生息するものと思われ、現在県内で知られている産地は日高市の1ヶ所のみ。谷津の埋め立て等で容易に絶滅する危険性があり、現に生息地の一部が埋め立てられている。分布域では各地のレッドデータブックに掲載されている種でもあり、希少性の高さをうかがわせる。

【形態の記載】体長16～20.5mm程度と大型で、頭部は黒色、前胸背板は黒色に側縁と前・後縁の狭い部分が明黄色で、上翅は赤褐色、肩部が絹目状の黄金色に光る。脚は腿節が黒色、脛節とふ節は赤褐色。色彩はジョウカイボンに似ているが、より幅広く、形態はむしろアオジョウカイやカタキンイロジョウカイ、キンイロジョウカイなどに良く似ている。

【分布の概要】関東地方と福島県の一部に分布。フォッサマグナ以西には近縁種のカタキンイロジョウカイが分布する。

【生息状況】県内では台地・丘陵帯の日高市栗坪にある谷津環境から発見されているのみで、他では見つからない。極めて局所的な分布で、谷津内でも成虫の見つかる範囲は流水とその周囲に湿地、ヤナギの林が広がる場所に限られている。

【生態的特性】湿地とその周辺に生息し、初夏の頃、草本の葉上あるいは樹木の葉上に静止する個体が観察される。花にもよく集まる。

【生息地の条件】ハンノキやヤナギの林と湧水起源の流水を伴う湿地環境がある谷津環境が残されていること。

【生存に対する脅威】湿地の乾燥化、水量の減少や水質の悪化、植生の変化、開発等による湿地の埋め立て等。

〔コウチュウ目 ジョウカイボン科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕カントウシリブトジョウカイ

〔学名〕*Yukikoa watanabei*

【摘要】従来、本属はキイロシリブトジョウカイただ1種と考えられていたが、最近になり分類学的研究が進められ、いくつかの種に細分化された。県内ではパラタイプを含め、奥秩父の沢沿いで僅かに得られているに過ぎない。

【形態の記載】幅広い体型で全身橙黄褐色、♀は腹部が大きい。本属の種は互いに極めてよく似た外形をしており、種の同定には交尾器の確認が必要である。

【分布の概要】本州でも奥秩父山地に局所的に分布する。

【生息状況】県内では秩父市（旧大滝村）にのみ生息が確認されている。

【生態的特性】沢沿いの林床を低く飛びまわり、下草などに止まっていることもある。詳しい生態は不明である。

【生息地の条件】自然環境の良好な林と豊富な水量の確保されている沢がある原生林的な環境を好む。

【生存に対する脅威】森林開発等。

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
④コウチュウ目  
昆虫類  
クモ類  
甲殻類  
多足類  
軟体動物  
扁形動物

〔コウチュウ目 ジョウカイモドキ科〕 **全県カテゴリー** 絶滅危惧Ⅱ類 **全国カテゴリー** -  
〔和名〕 イシハラジョウカイモドキ 〔学名〕 *Haplomalachius ishiharai*

〔摘要〕 埼玉県北本市の個体を基に記載された種である。これまで低地帯から台地・丘陵帯の谷津に残る湿地とその周辺から得られているが分布は局所的である。  
〔形態の記載〕 体型は細長く、上翅は後方に向かってやや広がる。体色は黒色で前胸背板ならびに上翅側縁部には淡黄褐色の紋がある。触角ならびに脚は黄褐色で部分的に黒色を帯びる。  
〔分布の概要〕 関東の平野部を中心に分布が確認されている。  
〔生息状況〕 埼玉県内では基準産地の北本市のほか、北川辺町、日高市、東松山市、嵐山町においてそれぞれ記録されている。  
〔生態的特性〕 湿地並びにその周辺の草地環境に生息し、産地では極めて局所的ではあるが個体数が多いこともある。食性は不明である。生態的知見としては北川辺町の渡良瀬遊水地で湿地周辺のチガヤの葉上に無数の個体が観察されたほか（豊田, 2001）、嵐山町における観察では湿地のスゲ類の花に飛来する個体が数回確認されている。  
〔生息地の条件〕 良好な環境の湿地とその周囲の草地が存在すること。  
〔生存に対する脅威〕 湿地の埋め立て、植生の遷移に伴う森林化、乾燥化など。

〔コウチュウ目 ケシキスイムシ科〕 **全県カテゴリー** 準絶滅危惧 **全国カテゴリー** -  
〔和名〕 オオキマダラケシキスイ 〔学名〕 *Soronia fracta*

〔摘要〕 低山地の雑木林に生息する種で、県内では外秩父山地からのみ得られている。外秩父の低山地はスギ・ヒノキの植林が多く、このため広葉樹の森は限られている。さらに残された雑木林も手入れが行き届かず老朽化で樹液が出る木が減っており、さらに近年のクワガタムシームに伴う過度の採集行為により樹液枯れ、もしくは木そのものが枯れてしまうケースが相次いでおり、本種の生息にも少なからず影響を与えていると思われる。  
〔形態の記載〕 大型のケシキスイで、♂の前脛節は中央付近で内側に曲がり、その先から先端にかけては広がっている。体色は褐色で、上翅には黄褐色による斑紋がある。  
〔分布の概要〕 北海道、本州、九州、対馬に分布。  
〔生息状況〕 埼玉県内では低山帯にのみ分布が確認されている。  
〔生態的特性〕 ミズナラ、コナラ、クヌギといった樹種の樹液に集まる。主に昼行性である。  
〔生息地の条件〕 樹液の豊富に出る木がいくつも確保されている雑木林があること。また、それらの木がクワガタムシ採集などを目的とした過度の採集圧にさらされておらず、樹液が安定的に出続けていること。  
〔生存に対する脅威〕 樹液の出る木の根元を掘る、樹皮を大幅に傷つけるなどの過剰な採集行為による樹液の枯渇。森林開発。森林の管理不行き届きによる老朽化。

〔コウチュウ目 オオキノコムシ科〕 **全県カテゴリー** 準絶滅危惧 **全国カテゴリー** -  
〔和名〕 トウキヨウムネビロオオキノコ 〔学名〕 *Microsternus tokioensis*

〔摘要〕 美しい小型のオオキノコで、各地に普通に産するネンドタケを食べる種であるが、環境の好みがあるようで非常に少ない種である。  
〔形態の記載〕 体長3.5～5mm。細長く、上翅には赤地に黒と黄の模様がある美麗種で、上翅基部内方に黒紋を生ずるのが特徴。脚は黒い。  
〔分布の概要〕 本州に分布する。  
〔生息状況〕 全国的に稀な種で、県内では平地帯のさいたま市（旧浦和市）と低山帯の神川町から記録されている。  
〔生態的特性〕 各地で普通に見られるキノコであるネンドタケを食べることで知られるが、生息環境が限定されるのか、全国的に記録の少ない種である。  
〔生息地の条件〕 人為的な影響の少ない河川林や寺社林において、ネンドタケの生育する環境があること。  
〔生存に対する脅威〕 生息地における乾燥化、開発行為とそれに伴う森林伐採等。

〔コウチュウ目 テントウムシ科〕 **全県カテゴリー** 準絶滅危惧 **全国カテゴリー** -  
〔和名〕 ナカイケミヒメテントウ 〔学名〕 *Scymnus nakaikemensis*

〔摘要〕 良好な環境の低湿地に生息する種で、県内で唯一知られていた東松山市の産地は消失した。渡良瀬の栃木県側でも記録があり、秋ヶ瀬でもそれらしき個体を採集しているので、今後新産地が増える可能性もある。  
〔形態の記載〕 体長1.7～2mm。体型はやや細長く、色彩は橙黄色で前胸背板基部と上翅会合部前半にかけて黒色紋があり、この斑紋は個体によっては肩部にまで伸長する。

【分布の概要】本州にのみ分布。福井県から記載された種であるが、関東平野にも広く分布し、隣接する栃木県では産地も複数確認されている。

【生息状況】台地・丘陵帯で東松山市毛塚の九十九川流域にあった湿地環境から複数個体が確認されていたが、この産地自体が耕地整備により消失した。さいたま市（旧浦和市）の秋ヶ瀬公園内でも生息を確認しており、また栃木県の渡良瀬遊水地でも本種が生息することから、埼

玉県側にも同様に生息する可能性がある。

【生態的特性】湿地の水面が見えるような水気の多い場所で、枯れ草やスゲ類の根元などから見つかる。

【生息地の条件】開放的で良好な湿地環境が保全されていること。

【生存に対する脅威】湿地の乾燥化、植生の遷移による草原化、湿地の埋め立て等開発行為。

〔コウチュウ目 テントウムシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕ムモンチャイロテントウ

〔学名〕*Micraspis kurosai*

【摘要】平野部とその周辺に点在する良好な湿地環境にのみ生息する小型のテントウムシ。同様の環境には他にも希少な種が多く見られる。県内における生息地はいずれも開発と隣り合わせの場所がほとんどで、これらの産地は植生の変化や乾燥化、あるいは開発行為等により近い将来消失する可能性が大きいことから、生息地の解明調査と保全対策が望まれる。

【形態の記載】小型のテントウムシで体型は丸く、体色は橙黄色。

【分布の概要】本州のみに分布。

【生息状況】埼玉県内では低地帯から台地・丘陵帯にかけての湿地環境に生息するが分布は局所的である。現在確認しているのは渡良瀬遊水地周辺、県東部の江戸川流域、川口市から北本市にかけての荒川流域、日高市、東松山市、

滑川町、嵐山町の各所に点在する湿地環境で、利根川本流域からはこれまで確認されていないが、群馬県側の多々良沼などには生息していることから埼玉県側にも産地がある可能性が高いと思われる。

【生態的特性】スゲ類が生い茂るような植生とその周辺部に見られることが多い。水辺でも水際ぎりぎりの部分に多く見られ、生息地における個体数は比較的多く、また成虫で越冬するため冬季はそうした環境の落葉下や石下などにおいて見出される。

【生息地の条件】スゲ類の生い茂る、良好な状態の湿地環境が残っていること。

【生存に対する脅威】湿地環境の植生遷移による草原化、乾燥化、埋め立て等。

〔コウチュウ目 テントウムシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕ムナグロチャイロテントウ

〔学名〕*Micraspis satoi*

【摘要】湿地に生息する小型のテントウムシ。北関東では各所に生息地が点在するが、県内ではこれまで1ヶ所のみで確認されている。

【形態の記載】小型のテントウムシでムモンチャイロテントウに極めてよく似ているが、前胸背板には黒色の紋があり、上翅も会合部が黒色となる。また♂交尾器の形状はムモンチャイロテントウとは中片基部の形状が異なり、これらの点から区別可能である。

大川（2002）の報告によれば、栃木県の渡良瀬遊水地で得られる本種は、同県内産の他産地の個体と比較して黒色紋が淡いとされ、埼玉県内で得られた個体もこれと同様に黒色紋がやや不鮮明であった。しかしながら♂交尾器の形状は本種の原記載に示された図と良く一致しており、同定は間違いないと思われる。

【分布の概要】本州のみに分布。関東地方では東部の栃木県や茨城県の湿地環境において生息地が点在しているよ

うで、ムモンチャイロテントウと同様の環境で同時に得られることが多い。

【生息状況】県内唯一の産地であった東松山市毛塚の九十九川流域にあった湿地は市の行った土地改良事業に伴う埋め立てでほぼ消失。その後再三にわたる調査でも周囲も含めて確認されていない。県外の利根川流域ではいくつか産地が知られており、またムモンチャイロテントウと同じような環境に生息することを考えると、今後県内で新たな産地が見つかる可能性は十分にあると言える。

【生態的特性】ムモンチャイロテントウと同様にスゲ類が生い茂るような植生とその周辺部に見られる。

【生息地の条件】スゲ類の生い茂る、良好な状態の湿地環境が残っていること。

【生存に対する脅威】湿地環境の植生遷移による草原化、乾燥化、埋め立て等。



哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
④コウチュウ目  
昆虫類  
クモ類  
甲殻類  
多足類  
軟体動物  
扁形動物

[コウチュウ目 テントウムシ科] **全県カテゴリ** 準絶滅危惧 **全国カテゴリ** -  
 [(和名) アイヌテントウ] [学名] *Coccinella ainu*

**【摘要】** ナナホシテントウに似たより小型のテントウムシで、主に河川の中流から上流にかけての河川敷で乾燥気味の場所に生息する種である。産地における個体数は決して多くはなく、県下ではいずれの産地でも単発的な記録のみである。  
**【形態の記載】** 体長4.3~5.6mm。前胸背板は黒色で前縁両端に乳白色の紋があり、上翅は橙赤色で黒色紋が会合部の基部に1つ、中央と後半部に大きな紋が1対ずつ、側縁に3対ある。ナナホシテントウに一見似るが、上翅の黒色紋の数の違いで容易に識別できる。  
**【分布の概要】** 北海道と本州に分布。  
**【生息状況】** 低地帯から低山帯にかけて生息しており、記

録の多くは秩父地域からのものである。低地帯でも昔の記録があるが、最近の生息状況は不明。今回の調査で秩父市下影森の荒川河川敷、同市中津川溪谷、深谷市の荒川河川敷と利根川河川敷からそれぞれ生息を確認している。  
**【生態的特性】** 河川敷などの植生がまばらな荒地的環境に生息し、花に飛来している姿を観察できる。花に集まるのは恐らくアブラムシ類を捕食するためであろう。  
**【生息地の条件】** 河川敷などの荒地環境が広範囲で存在すること。  
**【生存に対する脅威】** 河川改修、河川敷のグラウンド等への造成。

[コウチュウ目 ナガクチキムシ科] **全県カテゴリ** 準絶滅危惧 **全国カテゴリ** -  
 [(和名) コモンホソナガクチキ] [学名] *Phloeotrya trisignata*

**【摘要】** 十文字峠などの個体を基に記載された大型のナガクチキ。原生林でブナなどの巨木の立ち枯れや倒木に見られる種で、生息地は良好な森林環境に限定される。県内ではパラタイプを含め3頭の記録がある。  
**【形態の記載】** 体長9.5~16mm。黒色で細長く、前胸背板には前縁中央と後縁中央にそれぞれ橙赤色紋が、上翅は中央よりやや前半に波型の橙赤色帯と後半の翅淡やや手前に会合部をはさんで一つの橙赤色紋がそれぞれある。ふ節は先端2節が黄褐色。  
**【分布の概要】** 北海道から九州まで分布。  
**【生息状況】** 県内では亜高山帯の十文字峠からのみ記録さ

れ、そのほかにやはり山地帯の中津川溪谷の最深部から確認している。  
**【生態的特性】** ブナなどの大木の立ち枯れや倒木に集まり、樹皮に産卵する姿を確認している。日中はあまり目立たない倒木の下側にいることが多いようであり、注意しなければ発見できない。  
**【生息地の条件】** 大木の多い原生林が確保されており、安定的に倒木や立ち枯れが供給されていること。  
**【生存に対する脅威】** 大木の伐採、植林地の拡大。森の乾燥化。原生林の開発。

[コウチュウ目 ナガクチキムシ科] **全県カテゴリ** 準絶滅危惧 **全国カテゴリ** -  
 [(和名) ムネアカナガクチキ] [学名] *Phryganophilus ruficollis rosti*

**【摘要】** 大型で顕著なナガクチキ。全国的に採集例は多くない。原生林に生息するものと思われる。  
**【形態の記載】** 大型で、全身黒色に和名のとおおり鮮やかな赤色の前胸背板を持つ種。触角は短く数珠状。  
**【分布の概要】** 日本からシベリア、ヨーロッパにかけて広く分布する種で、日本産は別亜種とされ、北海道、本州、九州に分布する。

**【生息状況】** 県内の記録は国立科学博物館に所蔵されている秩父産（詳細不明）の古い標本ただ1頭のみで、最近の記録は無いようである。  
**【生態的特性】** 原生林的な森林環境に生息するものと考えられている種である。  
**【生息地の条件】** 原生林的な森林環境が残されていること。  
**【生存に対する脅威】** 大規模な森林伐採、乾燥化など。

[コウチュウ目 ナガクチキムシ科] **全県カテゴリ** 準絶滅危惧 **全国カテゴリ** -  
 [(和名) ボウズナガクチキ] [学名] *Bonzicus hypocrita*

**【摘要】** 大型のナガクチキで、採集例はあまり多くない。埼玉県内では過去に秩父の古い記録が1例あるのみ。  
**【形態の記載】** 大型で幅広く、触角はやや短い。体色は黒色、腿節や腹節の一部に橙黄色の部分がある。  
**【分布の概要】** 北海道から九州まで分布し、国外では台湾にも分布する。  
**【生息状況】** 県内では秩父市（旧大滝村）の白岩山で得ら

れた古い記録が1例あるのみのようである。  
**【生態的特性】** 高標高地に残る原生林的な森林環境に生息する種と思われる。  
**【生息地の条件】** 山地帯の高所において原生林的な森林環境が保存されていること。  
**【生存に対する脅威】** 大規模な森林伐採、乾燥化など。

【コウチュウ目 ナガクチキムシ科】

【全県カテゴリー】 準絶滅危惧

【全国カテゴリー】 -

【和名】 オオナガクチキ

【学名】 *Melandrya niponica*

【摘要】 大型のナガクチキムシの一種。県内では秩父市中津川溪谷最深部の原生林で2頭が得られているのみ。巨木の森が生息の条件と思われる。

【形態の記載】 体長11~19mmと非常に大型で、体色は黒に近い黒褐色。脚は暗褐色で、前胸背板は中央両側が大きくくぼみ、上翅には隆条が明瞭。

【分布の概要】 北海道、本州、四国に分布。

【生息状況】 山地帯の秩父市中津川溪谷最深部にある巨木

の生い茂る原生林の中で得られている。

【生態的特性】 プナなどの大木の立ち枯れや倒木に集まる。倒木の下側に潜んでいることが多いようであり、注意しなければ発見できない。

【生息地の条件】 大木の多い原生林が確保されており、安定的に倒木や立ち枯れが供給されていること。

【生存に対する脅威】 大木の伐採、植林地の拡大。森の乾燥化。原生林の開発。

【コウチュウ目 ツチハンミョウ科】

【全県カテゴリー】 準絶滅危惧

【全国カテゴリー】 -

【和名】 マルクビツチハンミョウ

【学名】 *Meloe corvinus*

【摘要】 草原環境に生息する種で、秩父のわりと標高の低い地域にいくつか産地が確認されている。草地環境は住宅等の開発により産地が減少することが予想される。

【形態の記載】 体長7~27mmと変異が大きく、体色は黒青色。触角は♀とも糸状で数珠状となり、頭部と前胸背板、上翅は粗大な点刻と皺状の表面である。前胸背板は幅広い。

【分布の概要】 国内では北海道から九州、対馬まで分布。

【生息状況】 秩父の山地帯に生息しており、武甲山とその周辺の山から記録がある。皆野町蓑山ではかつて山頂付近にたくさん見られたが、公園整備により生息地の環境が変化し、近年の確認例は無いようである。最近では小鹿野町長留から産地が報告されている。

【生態的特性】 幼虫がハナバチ類に外部寄生することで知られ、成虫は開けた草地で、どちらかと言えばアザミなどの草が生えている場所や裸地に近い環境を好む。草の葉を食べながら集団で移動する個体群を目にすることも

【生息地の条件】 幼虫はハナバチ類に外部寄生することから、ハナバチ類の生息に適した森林と草地が一体となった環境が生息地の条件である。また、ハナバチ類が吸蜜に訪れ、なおかつ孵化した幼虫がハチにしがみ付くために登りやすい高さのアザミなどの花が多くあることも重要である。

【生存に対する脅威】 草原や森林の開発行為。アザミなど花の咲く草本類の減少。ハナバチ類の減少。

【コウチュウ目 カミキリムシ科】

【全県カテゴリー】 絶滅危惧Ⅱ類

【全国カテゴリー】 -

【和名】 ベーツヒラタカミキリ

【学名】 *Eurypoda batesi*

【摘要】 古木の生い茂る照葉樹林に生息するカミキリムシの一種。県内では1例のみが知られ、平野部の寺社等に残る照葉樹巨木の洞を調査する必要があるが、こうした環境は現在ほとんど残っておらず、本種の生息状況も危ういことは容易に想像できる。

【形態の記載】 体型は平たく、前胸背板、頭部は幅広く複眼も良く発達し、大顎も発達する。体色はあめ色がかつた暗赤褐色。

【分布の概要】 本州から琉球列島まで広く分布し、関東近隣では照葉樹林の分布とほぼ同様の分布を示すことが知

られている。

【生息状況】 県内では大宮の古い記録が1例知られるのみ。低地帯から台地・丘陵帯にかけて照葉樹林の残る場所に生息するものと思われるが、夜行性で調査が困難なこともあり、県内における分布の概要は明らかでない。

【生態的特性】 照葉樹林等の大木が残る場所に生息し、樹木の洞や樹皮の隙間などに潜んでいる。ライトに誘引されることもある。

【生息地の条件】 大木の残る照葉樹林が残されていること。

【生存に対する脅威】 森林伐採。森林の乾燥化など。

【コウチュウ目 カミキリムシ科】

【全県カテゴリー】 準絶滅危惧

【全国カテゴリー】 -

【和名】 ベニバナカミキリ

【学名】 *Paranaspia anaspidoidea*

【摘要】 ケヤキなどの樹洞に生息するハナカミキリの一種。県内では平地帯から台地・丘陵帯にかけて数例が知られるが、本種の依存する洞があるようなケヤキの大木は少ないことから、産地は限られる。

【形態の記載】 体長8~14mm。全身黒色で、上翅は暗赤色。前胸背板は基方が側方に突出し、台形に近い形状である。触角は各節が比較的長く、鋸歯状にはならない。

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

④コウチュウ目

昆虫類

クモ類

甲殻類

多足類

軟体動物

扁形動物

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
④コウチュウ目  
昆虫類  
クモ類  
甲殻類  
多足類  
軟体動物  
扁形動物

【分布の概要】北海道から九州、対馬、屋久島まで分布。  
 【生息状況】平地帯から台地・丘陵帯にかけて記録がみられる。記録はいずれも単発的なものでたくさんの個体が洞から得られた報告は県内ではない。  
 【生態的特性】ケヤキなど広葉樹の樹洞内にひそみ、クリやガマズミなどの花にも訪れる。幼虫は洞の腐朽部を食べて育つ。

【生息地の条件】洞を持つケヤキなどの大木が確保されていること。また周囲に成虫の餌となるクリやガマズミなど成虫の発生期に花をつける樹種が多くあることも重要である。  
 【生存に対する脅威】生息地である大木の伐採。餌源となるクリ林などの減少。

〔コウチュウ目 カミキリムシ科〕 **全県カテゴリー** 準絶滅危惧 **全国カテゴリー** -  
 〔和名〕オニホソコバナカミキリ 〔学名〕*Necydalis gigantea gigantea*

【摘要】クワなどの生木で一部枯死したものに依存する大型のハチに似たカミキリムシ。発生木が限定されることから採集例も少なく、また養蚕業の衰退により各地で桑園が無くなっていることから生息状況は悪化しているものと判断される。  
 【形態の記載】体長16.5～34mmと巨大な種で、外見はハチに良く似ており、上翅が短く後翅が腹部背面を被うように露出している。体色は黒色で、触角や脚の一部、腹部基部は黄褐色。体側面は黄金色の毛で被われる。  
 【分布の概要】北海道から九州まで分布。  
 【生息状況】県内では秩父市（旧大滝村）の山地帯に位置

する中津川溪谷で得られた1例のみが確認されている。  
 【生態的特性】幼虫はクワやケヤキ、トチノキなどの生木の枯死部を食べて育つ。成虫は発生木の周囲でよく見付き、花に来ることもある。かつては桑園で多く見られた種であるが、養蚕業の衰退により各地で個体数が減少している。  
 【生息地の条件】幼虫の成育に適した条件を持つクワやケヤキ、トチノキなどの樹木が数多くあること。また成虫の餌源となる花が多いこと。  
 【生存に対する脅威】桑園の減少、消滅。発生木の伐採。里山や森林の開発。

〔コウチュウ目 カミキリムシ科〕 **全県カテゴリー** 準絶滅危惧 **全国カテゴリー** -  
 〔和名〕クスベニカミキリ 〔学名〕*Pyrestes nipponicus*

【摘要】主にクスノキ科植物に依存するカミキリムシで、照葉樹の森が生息にとって重要であり、県内でも記録が少ない。しかしながら街中に残る屋敷林でも得られることがあり、平野部でのさらなる調査が必要と思われる。  
 【形態の記載】体長14.5～19mm。全体に光沢があり前胸背板と触角は暗赤色。上翅は赤色。他は暗褐色である。触角は鋸歯状で、♂は特に強く、脚は短い。  
 【分布の概要】北海道から九州、対馬、屋久島まで分布。奄美以南には別種のアマミクスベニカミキリが、八重山諸島には同じくマツダクスベニカミキリがそれぞれ分布する。  
 【生息状況】県内では台地・丘陵帯から山地帯にかけて数

例確認されている。記録地を標高などから見ると照葉樹林とは関係のない場所も多く、クスノキ科以外の寄主で発生していることがうかがえる。  
 【生態的特性】クスノキ、タブノキなどのクスノキ科を主な寄主植物とし、通常は照葉樹林に多く見られる。神社などクスノキ科植物の多い場所では樹幹を飛び回る成虫の姿を見ることが出来る。  
 【生息地の条件】発生木となるクスノキ科等の植物が数多くあること。  
 【生存に対する脅威】照葉樹林の伐採。神社や屋敷林などに残るクスノキ科植物の伐採。

〔コウチュウ目 カミキリムシ科〕 **全県カテゴリー** 準絶滅危惧 **全国カテゴリー** -  
 〔和名〕アカアシオアオオカミキリ 〔学名〕*Chloridolum japonicum*

【摘要】平地から台地にかけての雑木林に生息する大型のアオカミキリ。夜行性で夜間樹液に集まる。平野部では産地が減少していることから、生息が危惧される。  
 【形態の記載】体長25～30mm。体色は赤褐色で、頭部、前胸背板ならびに上翅は金緑色。まれに赤味がかる個体もいる。脚と触角は長く、特に♂は触角が体長の倍程度。

【分布の概要】国内では本州、四国、九州に分布。  
 【生息状況】低地帯と台地・丘陵帯からのみ確認されている。低地帯では雑木林が減少の一途をたどっており、生息は危機的な状況であると思われる。台地・丘陵帯では生息地においては個体数も比較的多いが、産地自体はそれほど多くない。

【生態的特性】夏季の夜間、樹液に集まる成虫の姿を目にする。幼虫はクスギなどを寄主とする。

【生息地の条件】樹液の豊富に出る木がいくつも確保されている雑木林があること。また、それらの木がクワガタムシ採集などを目的とした過度の採集圧にさらされてお

らず、樹液が安定的に出続けていること。

【生存に対する脅威】樹液の出る木の根元を掘る、樹皮を大幅に傷つけるなどの過剰な採集行為による樹液の枯渇。森林開発。森林の管理不行き届きによる老朽化。

〔コウチュウ目 カミキリムシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕アオカミキリ

〔学名〕*Schwarzerium quadricollis*

【摘要】主にカエデ類を寄主とするカミキリムシで、県内では山地帯で現在でも確認されているが、カエデ類の自生があまりない平野部では近年の記録がなく、生息が危惧される状況である。

【形態の記載】体長21～30mm。体色は深い青緑色で頭部、前胸背板ならびに上翅は緑色の金属光沢。触角は比較的短い。

【分布の概要】国内では北海道から九州、対馬まで分布。

【生息状況】低地帯から山地帯まで広く生息が確認されているが、平野部を中心に古い記録がほとんどで、最近の

記録は秩父以外では無いことから、県東～中部での生息が危惧される。

【生態的特性】成虫は梅雨から夏季にアカメガシワやノリウツギの花に訪れ、幼虫はイロハモミジやイタヤカエデなどカエデ類等を寄主植物とする。

【生息地の条件】幼虫の寄主となるカエデ類などの植物が豊富で、なおかつ成虫の餌源となる花をつける植物が多いこと。

【生存に対する脅威】平野部から低山帯におけるカエデ類の減少。森林伐採等。

〔コウチュウ目 カミキリムシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕オオトラカミキリ

〔学名〕*Xylotrechus villioni*

【摘要】日本最大のトラカミキリ。モミなどの針葉樹に依存し、幼虫の加害痕は外部から容易に確認可能である。

【形態の記載】体長23～27mm。トラフカミキリに似るが、前胸背板の模様などで容易に識別できる。

【分布の概要】北海道、本州、四国に分布。

【生息状況】亜高山帯と台地・丘陵帯から確認されている。

【生態的特性】成虫はモミ、コメツガなどの針葉樹に集ま

り、シシウドの花上で発見されることもある。幼虫は樹木の枝内を主に加害し、遠くからでも確認できる。

【生息地の条件】モミやコメツガなどの森林があること。

【生存に対する脅威】モミやコメツガの大規模な伐採。特にモミは丘陵地では開発の対象になりやすい場所に生育しており、保全が望まれる。

〔コウチュウ目 カミキリムシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕トラフカミキリ

〔学名〕*Xylotrechus chinensis chinensis*

【摘要】スズメバチに良く似た外見のトラカミキリ。かつては桑の害虫として養蚕農家に知られた虫であるが、養蚕業の衰退から丘陵地の桑園は壊滅的となり、本種もほとんど見られなくなった。桑園のあった丘陵地帯は住宅地や工場などの開発が行われやすいことから、今後ますます本種の生息域は狭められるものと考えられる。

【形態の記載】体長17～26mm。体色はスズメバチ類に良く似ており、黄色に黒の縞模様が鮮やかで、前胸背板は赤色紋がある。触角は短い。

【分布の概要】国内では北海道から琉球列島の宮古島まで広く分布。

【生息状況】低地帯から山地帯まで広く生息し、記録も多いが、最近の記録はめっきり少なくなった。桑園の残る地域を中心に今でも確認できるが、平地帯では桑園の状況から推察するに絶滅寸前に近いものと思われる。

【生態的特性】クワを寄主とし、かつては桑園で多く見られたカミキリムシである。梅雨から晩夏にかけてクワの生木周辺で静止する個体を見かける。

【生息地の条件】クワの古木が多くある桑園のような環境があること。

【生存に対する脅威】桑園跡地の開発。クワの古木の伐採。

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

④コウチュウ目

昆虫類

クモ類

甲殻類

多足類

軟体動物

扁形動物

哺乳類	<p>〔コウチュウ目 カミキリムシ科〕 <b>全県カテゴリー</b> 準絶滅危惧 <b>全国カテゴリー</b> -</p> <p>〔和名〕 キジマトラカミキリ <b>〔学名〕</b> <i>Xylotrechus zebratus</i></p>
鳥類	<p>【摘要】 亜高山帯に生息するトラカミキリの一種。十文字峠産の個体がパラタイプに指定されている。</p> <p>【形態の記載】 体長10～15mm。頭部は黒色。上翅は黒色で基部に褐色紋があり、その後方に4本の黄色帯がある。ニイジマトラカミキリに一見似るが、本種は前胸背板に白色横帯が無いことや上翅の紋の違いで区別できる。</p> <p>【分布の概要】 本州と九州の山岳地帯に分布。</p> <p>【生息状況】 奥秩父の亜高山帯で生息が確認されている。</p> <p>長瀬での記録は遺産と思われる。</p> <p>【生態的特性】 稜線沿いのシラビソやコメツガの森に生息する。近年の記録はほとんど無いようである。</p> <p>【生息地の条件】 亜高山帯で良好な森林環境が保全されていること。</p> <p>【生存に対する脅威】 森林伐採、乾燥化、鹿による植物への食害など。</p>
爬虫類	<p>〔コウチュウ目 カミキリムシ科〕 <b>全県カテゴリー</b> 情報不足 <b>全国カテゴリー</b> -</p> <p>〔和名〕 イワワキセダカコブヤハズカミキリ <b>〔学名〕</b> <i>Parechthistatus gibber shibatai</i></p>
両生類	<p>【摘要】 後翅の退化したカミキリムシで、ブナ帯を中心に生息する。埼玉県は本亜種の分布東限に近いと思われるが、記録は高校生により報告された1例のみで、その後半世紀以上も記録がなく、分布自体を疑問視する研究者もいる。しかしながら隣接する奥多摩での報告等もあり、追加情報が期待される。</p> <p>【形態の記載】 体長10.5～18.0mm。♂は触角が長く、個体によっては体長の3倍近くになる。上翅は肩部後方より膨隆して角ばり、両側はほぼ平行で翅端部は棘状。上翅基部にはコブヤハズカミキリやフジコブヤハズカミキリが持つ黒色の瘤は無く、小さな顆粒がある程度である。</p> <p>【分布の概要】 本種は本州の関東地方から四国、九州、対馬まで分布し、そのうち本亜種については関東中部の太</p> <p>平洋側から近畿地方にかけて分布するが、産地が連続しておらず、各個体群が山岳地帯に孤立する状況にある。</p> <p>【生息状況】 県内では半世紀以上に、現在の秩父市三峰山付近にある白岩山から雲取山にかけて夏季に得られた採集例が唯一の記録である。しかしながら隣接する東京都奥多摩地区の天祖山や日原でも本種は記録されており、分布の可能性は高い。</p>
魚類・円口類	<p>【生態的特性】 ブナ帯に生息し、飛翔能力がないため歩行による移動のみで、林床の落葉中や倒木上に見られる。</p> <p>【生息地の条件】 湿度の維持された自然林が広範囲で保存されていること。</p> <p>【生存に対する脅威】 森林伐採など。</p>
④コウチュウ目 昆虫類	<p>〔コウチュウ目 カミキリムシ科〕 <b>全県カテゴリー</b> 準絶滅危惧 <b>全国カテゴリー</b> -</p> <p>〔和名〕 フジコブヤハズカミキリ <b>〔学名〕</b> <i>Mesechthistatus fujisanus</i></p>
クモ類	<p>【摘要】 歩行性のカミキリムシで、枯葉に集まる。県内では記録が少ないが、最近の採集例もある。しかし本種の好む環境は登山道沿いに多く、登山者の急激な増加に伴い生息環境の悪化が予想される。</p> <p>【形態の記載】 体型は太く、肩が強く張り出し、上翅端は鋭く尖る。体表面はゴツゴツしており、上翅中央部よりやや後方に明色の帯状紋を有し、他は全体が濃茶褐色である。♂は♀に比べ触角が長い。</p> <p>【分布の概要】 本州の富士山、丹沢山地、秩父山地、八ヶ岳、筑摩山地と三国山脈の一部において分布。</p> <p>【生息状況】 県内では秩父地方の山地帯から亜高山帯にかけてわずかに記録があり、近年でもその生息が確認されている。</p> <p>【生態的特性】 標高1,200m前後のブナ帯から針葉樹林帯にかけて生息し、林道などの開けた場所に面した林床、あるいは道脇に繁茂した草本類の枯葉といった場所で見つかることが多い。後翅が縮小し飛べないことから、歩行による移動のみで活動するため、樹の高い位置から得られることは稀である。また、オサムシなどを採集するために設置したバイトトラップに落ちることもある。</p> <p>【生息地の条件】 林縁などやや開けた場所が維持されていること。また、ある程度生息地での湿度が保たれていること。</p> <p>【生存に対する脅威】 登山道整備などに伴う生息環境の改変、それに伴う乾燥化。また、近年の鹿の増加による草本類の急激な減少が影響を及ぼす可能性も考えられる。</p>
甲殻類	<p>【生息地の条件】 林縁などやや開けた場所が維持されていること。また、ある程度生息地での湿度が保たれていること。</p> <p>【生存に対する脅威】 登山道整備などに伴う生息環境の改変、それに伴う乾燥化。また、近年の鹿の増加による草本類の急激な減少が影響を及ぼす可能性も考えられる。</p>
多足類	
軟体動物	
扁形動物	



〔コウチュウ目 カミキリムシ科〕 **全県カテゴリー** 準絶滅危惧 **全国カテゴリー** -

〔和名〕 ヒメビロウドカミキリ **〔学名〕** *Acalolepta degener*

【摘要】 草原でオトコヨモギ等に依存する小型のカミキリムシ。生息地はいずれも開発と隣り合わせの環境であり、また外来植物の進入により食草が減少することでも生息地は脅威にさらされる。

【形態の記載】 体長8.5~12mm。触角が長く、細長い体型である。体色は褐色で全体に灰白色の微毛による斑紋を生じる。

【分布の概要】 本州の新潟県と関東以西より九州、対馬に分布。

【生息状況】 低地帯と低山帯から亜高山帯にかけて分布。

【生態的特性】 草原性のカミキリムシで、主にキク科のオトコヨモギの群生する荒地的環境に生息し、発生時期には個体数も多い。しかしながら生息地は草原の中でも局所的である。食草がある程度株立ちした頃に、下部についた枯葉や茎の太い部分に静止する個体が観察される。灯火にも集まる。

【生息地の条件】 オトコヨモギ等の群落が見られる草原環境が広く確保されていること。

【生存に対する脅威】 林道脇や河川敷などにある草原環境の改変行為。外来植物の進入による植生の変化。

〔コウチュウ目 カミキリムシ科〕 **全県カテゴリー** 準絶滅危惧 **全国カテゴリー** -

〔和名〕 シロスジカミキリ **〔学名〕** *Batocera lineolata*

【摘要】 かつてはどこにでも見られた種であるが、各地でおこった雑木林の老朽化により、発生に適した若い木が減ってしまったため、ここ20年ほどで急激に減っている。一部の再生された雑木林では安定的に発生しているようであるが、生息地の分断化が心配される。

【形態の記載】 大型で触角は長く伸長し、体全体が微毛に被われ上翅と前胸背板には黄色の紋があり、この紋の色彩は死ぬと白色に変わる。上翅肩部には艶のある瘤上隆起を密に生じ、上翅肩部ならびに前胸背板側縁には鋭い棘がある。

【分布の概要】 国内では本州から九州の奄美大島まで分布。

【生息状況】 県内では低地帯に記録が多く、山地帯まで広く分布しているが、近年の記録は少ない。

【生態的特性】 クヌギやコナラ、カシ類といった樹木に依存し、幼虫はこれらの生木内を食害する。成虫は主に夜行性で、雑木林内などの樹木の幹表面を徘徊する。産卵はある程度成長した樹木の幹に行われ、幹周りに特徴的な産卵痕を残す。

【生息地の条件】 若い樹木が安定的に生育している雑木林があること。

【生存に対する脅威】 雑木林の管理不足による老朽化、森林伐採による森林の消滅など。

〔コウチュウ目 カミキリムシ科〕 **全県カテゴリー** 準絶滅危惧 **全国カテゴリー** -

〔和名〕 チチブニセリンゴカミキリ **〔学名〕** *Niponostenostola niponensis niponensis*

【摘要】 山地の森林に生息するカミキリムシ。県内では生息地も限られ、記録が少ない状況である。

【形態の記載】 体長10~13mm。上翅は黒色。前胸背板は赤褐色で大きな黒色紋がある。

【分布の概要】 本州、四国、九州ならびに佐渡ヶ島に分布。

【生息状況】 秩父山地の低山帯から亜高山帯まで広く生息し、記録はもともと少ない。近年の採集例は特に少ない

ようである。

【生態的特性】 主に温帯林上部のブナ、シナノキ、サワグルミなどが生える樹林帯に生息し、これらの葉を食べる。

【生息地の条件】 ブナなどで構成される自然林が残されていること。

【生存に対する脅威】 森林伐採、乾燥化など。

〔コウチュウ目 ハムシ科〕 **全県カテゴリー** 絶滅危惧 I B類 **全国カテゴリー** -

〔和名〕 ツヤネクイハムシ **〔学名〕** *Donacia nitidior*

【摘要】 本州からのみ知られるネクイハムシの一種。湿地のスゲ類に見られる。

【形態の記載】 体長6.5~7.0mm。ネクイハムシの仲間としては触角が短く、上翅端部は丸い。全身に金属光沢があり、通常は銅黒色で個体によっては青色のものもいる。

【分布の概要】 本州に分布。

【生息状況】 埼玉県では狭山丘陵や比企丘陵の谷津に生息

が確認されており、各産地における生息範囲はいずれも狭い。飯能市の産地は個体数こそ多いものの、ハイキングコースのすぐ脇に産地があるため生息状況は安泰とはいえない。嵐山町の産地では1頭確認されて以後全く得られず、環境も森林化が進んでいることから絶滅が危惧されている。

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

④ コウチュウ目  
昆虫類

クモ類

甲殻類

多足類

軟体動物

扁形動物

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
④コウチュウ目  
昆虫類  
クモ類  
甲殻類  
多足類  
軟体動物  
扁形動物

【生態的特性】 湿地のスゲ類が生育する場所とその周辺で生活し、花の時期に花に群がるのが観察される。幼虫はスゲの根を加害する。  
【生息地の条件】 スゲ類の生育する湿地が安定的に保たれ

ていること。  
【生存に対する脅威】 湿地の埋め立て、乾燥化による湿地環境の変化、植生の遷移による森林化など。

〔コウチュウ目 ハムシ科〕 **全県カテゴリー** 準絶滅危惧 **全国カテゴリー** -  
〔和名〕 **ネクイハムシ** 〔学名〕 *Donacia lenzi*

【摘要】 池沼の浮遊水生植物に依存するネクイハムシ類。植生の存在が生息にとって重要である。  
【形態の記載】 体長6～8mm。体色は緑銅色から紫銅色、青銅色で、腹面には白い剛毛を密生する。  
【分布の概要】 北海道から九州と五島列島に分布。  
【生息状況】 低地帯のみで記録があるが、近年の記録がない。食草のうちジュンサイは県内ですでに絶滅状態にあり、ヒツジグサも絶滅に近い状態のようである。このことか

ら県内での生息確認は極めて困難な状況である。  
【生態的特性】 ジュンサイやヒツジグサといった水生植物について生活している。  
【生息地の条件】 ジュンサイやヒツジグサが繁茂する、きれいで冷たい水をたたえた池沼が残されていること。  
【生存に対する脅威】 水質悪化、水温上昇、ジュンサイやヒツジグサの消滅、埋め立て等。

〔コウチュウ目 ハムシ科〕 **全県カテゴリー** 準絶滅危惧 **全国カテゴリー** -  
〔和名〕 **スゲハムシ** 〔学名〕 *Plateumaris sericea*

【摘要】 鮮やかな金属色のネクイハムシ類で、主に良好な湿地環境が保存されている谷津のスゲやガマから見出される。  
【形態の記載】 体長7～11mm。体色は黒青色から紫青色、緑青色、赤銅色まで様々であるが、個体群によっては完全な黒色に近いものまで現れる。  
【分布の概要】 国内では本州、九州に分布。  
【生息状況】 産地は局所的で、台地・丘陵帯から低山帯にかけてと、亜高山帯から記録がある。新たな産地も小川

町などから追加されている。  
【生態的特性】 成虫はガマやスゲ類の花に集まり、幼虫はその根を加害する。  
【生息地の条件】 スゲ類などが密生する湿地環境が保たれていること。  
【生存に対する脅威】 植生の遷移によるスゲ類やガマ類の消失。また生息地そのものの乾燥化や開発に伴う埋め立てなど。

〔コウチュウ目 ハムシ科〕 **全県カテゴリー** 絶滅危惧Ⅱ類 **全国カテゴリー** -  
〔和名〕 **オオルリハムシ** 〔学名〕 *Chrysolina virgata*

【摘要】 湿地のシソ科植物に依存する大型のハムシ。かつては環境省のレッドリストにも情報不足の種として名前が挙がっていたが、2007年版のレッドリストではランク外に扱いが変更されている。県内では古い記録が多く、最近の記録は県東部の平地帯に限られる。食草のシロネの分布状況を考えると、産地はそう多くないと思われる。  
【形態の記載】 体長11～15mm。大型のハムシで、体高は高く、上翅は赤褐色で全身に緑色味を帯びた金属光沢を有する。東北地方の日本海側では全身青藍色となる。後翅の発達具合は様々であるが、Suzuki (1978) や岩井・八木 (2003) の報告では飛翔しないものと考えられている。  
【分布の概要】 国内では本州にのみ分布し、関東以西では産地も限定される。  
【生息状況】 低地帯から低山地まで広く記録されており、

かつては県内でも産地が多かったようである。しかしながら台地・丘陵帯や低山地での近年の記録は無く、これらの産地での生息は危機的状況であることがうかがえる。低地帯では一部地域に限られるものの現在でも生息地が確認されており、渡良瀬遊水池周辺では個体数も安定しているようである。  
【生態的特性】 シソ科のシロネやヒメシロネ、ハッカなどに依存し、湿地のヨシ原の中に生えたこれらの植物上に見られる。  
【生息地の条件】 シソ科のシロネ、ヒメシロネ、ハッカなど本種の食草となる植物が生育するヨシ原などの湿地植生が広範囲にわたり確保されていること。  
【生存に対する脅威】 湿地の埋め立て、湿地の乾燥化、植生の遷移による湿地植生の消失等。

〔コウチュウ目 ハムシ科〕

【全県カテゴリー】 準絶滅危惧

【全国カテゴリー】 -

〔和名〕 タグチホソヒラタハムシ

〔学名〕 *Leptispa taguchii*

【摘要】 以前は「トゲナシトゲトゲ」や「トゲナシトゲハムシ」の和名で親しまれた種で、ススキの葉の間に生息する細くて黒いハムシの一種。産地が限られるため記録は少なく、県内でもほとんど確認されていない。

【形態の記載】 体長4.2~5.3mm。全身黒色で細長く、触角と脚は短い。前胸背板は前方にやや広がり、上翅の点刻列はやや弱い。

【分布の概要】 本州、九州に分布。

【生息状況】 さいたま市（旧大宮市）見沼の芝川付近に位置する大砂土から記録があり、深谷市（旧川本町）の荒川河川敷左岸でも環境アセスメントの調査で確認されて

いるが、後者の産地は現在大型重機による作業が実施され、それに伴い完全に消失した。

【生態的特性】 ススキの葉の隙間に生息し、ススキの葉を食べる。ススキの群落ならどこでもいるというのではなく、河川敷など水辺に近い場所のススキに生息するようで、こうした場所は通常ヨシやオギの群落が形成されやすいことから産地は限定されるものと思われる。

【生息地の条件】 河川敷など水辺にススキの群落が発達すること。

【生存に対する脅威】 生息地の開発造成による植生の消失。

〔コウチュウ目 チョッキリゾウムシ科〕

【全県カテゴリー】 準絶滅危惧

【全国カテゴリー】 -

〔和名〕 オオケブカチョッキリ

〔学名〕 *Haplorhynchites amabilis*

【摘要】 県内では低地帯のさいたま市（旧浦和市）と渡良瀬川周辺のみで確認されている。食草は絶滅危惧のノカラマツ等のカラマツソウ属であり、産地は限定される。

【形態の記載】 体長4.5~5.4mm。吻は細長く、前胸背板の丸みが高い。全体青藍色で黒褐色毛に覆われ、体型はやや幅広い。

【分布の概要】 国内では本州と九州に分布。

【生息状況】 低地帯のさいたま市（旧浦和市）の荒川付近と北川辺町の渡良瀬川河川敷内から記録があるのみ。食

草の分布状況が明らかになればより詳細な分布調査が可能と思われる。

【生態的特性】 河川敷に生えるノカラマツなど、カラマツソウ属に依存し、新芽の出る時期に観察される。

【生息地の条件】 カラマツソウ属の群落が見られる、背丈の低く日当たりの良い草原環境が維持されていること。

【生存に対する脅威】 遷移の進行によるカラマツソウ属群落の消失。河川改修等の工事に伴う大型重機の乗り入れ、レジャー目的などオフロード車の河川敷への乗り入れなど。

〔コウチュウ目 ゾウムシ科〕

【全県カテゴリー】 絶滅危惧Ⅱ類

【全国カテゴリー】 -

〔和名〕 オナガカツオゾウムシ

〔学名〕 *Lixus moiwanus*

【摘要】 湿地のドクゼリに見られる細長いカツオゾウムシの一種。ドクゼリの大きな群落が見られる湿地は県内でも限られており、現地調査により県内での生息状況が明らかになってきたため、今回ランク変更とした。

【形態の記載】 体長12~13mm。体型は長細く、円筒形に近い。翅端は鋭く尖がる。オオカツオゾウムシ *L. divaricatus* に良く似るが、この種は体がより太く、前胸背板は基部で最大幅なのに対し、オナガカツオゾウムシの前胸背板は両側ほぼ平行であるので区別できる。

【分布の概要】 国内では北海道、本州に分布。

【生息状況】 低地帯のさいたま市（旧浦和市）大門と台地・

丘陵帯の東松山市毛塚から記録があり、今回の調査で台地・丘陵帯の日高市栗坪から新たな産地が見つかった。

【生態的特性】 湿地のドクゼリに依存し、ドクゼリの群落が発達する場所でドクゼリの葉上に静止している個体が確認されるが、人の気配に敏感で、近づくと落下してしまうことも多い。

【生息地の条件】 ドクゼリの群落が見られる植生の湿地があること。

【生存に対する脅威】 湿地の乾燥化、遷移の進行によるドクゼリ群落の衰退、消失。湿地の埋め立て等開発行為。

〔コウチュウ目 ゾウムシ科〕

【全県カテゴリー】 準絶滅危惧

【全国カテゴリー】 -

〔和名〕 クロイネゾウムシ

〔学名〕 *Notaris oryzae*

【摘要】 水辺に生えるマコモの水中に没した部分で生活するゾウムシの一種。マコモの大きな群落が見られる場所に生息することから生息域は限定される。

【形態の記載】 全体黒色、吻は長く、上翅には白色の紋がある。

【分布の概要】 北海道、本州、九州に分布。

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

④ コウチュウ目

昆虫類

クモ類

甲殻類

多足類

軟体動物

扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
④コウチュウ目
昆虫類
クモ類
甲殻類
多足類
軟体動物
扁形動物

【生息状況】 低地帯から台地・丘陵帯にかけての大河川の岸辺や大きな池沼の岸に生育するマコモの周囲に分布する。  
 【生態的特性】 マコモの茎にしがみつくように生活しており、水中をかき回すと浮かんでくる。  
 【生息地の条件】 マコモの大きな群落が安定的に存在する

こと。  
 【生存に対する脅威】 水辺の護岸等改修工事に伴うマコモ群落の消滅。マコモ自体は水質の汚濁に強い植物であるが、水中にヘドロが堆積するような場所では本種の生息は確認できないため、水質も重要であると思われる。

〔コウチュウ目 ゾウムシ科〕

全県カテゴリー 準絶滅危惧

全国カテゴリー -

〔和名〕 ババスゲヒメゾウムシ

〔学名〕 *Limnobaris babai*

【摘要】 スゲに依存する、低湿地に生息するヒメゾウムシの一種。稀な種であるが、生息地では個体数も多く、生息環境さえあれば個体群の維持はさほど問題とならないようである。しかしながら県内での低湿地は減少傾向にあり、特に広範囲に渡るスゲ群落は希少な存在であることから、本種の生息域も限定される。  
 【形態の記載】 体長38~42mm。体型は細長く、全体黒色。体下面には一部に灰色の鱗片を生ずる。  
 【分布の概要】 本州、九州に分布。  
 【生息状況】 低地帯の湿地からのみ確認されている。県境の渡良瀬遊水地では多くの個体が確認されていることから、

この周辺や下流域にも生息するものと思われるが、今のところ本種の報告は無いようである。  
 【生態的特性】 湿地のスゲ類に依存しており、これらの葉上や基部の葉と葉の隙間に潜む個体が確認される。一度に多数の個体が確認できるが、産地においても局所的な発生で、微環境が影響するものと思われる。  
 【生息地の条件】 開放的な空間で、水面からスゲが生えるような湿地環境が広範囲で存在すること。  
 【生存に対する脅威】 湿地環境の乾燥化、植物の遷移によるスゲ群落の消失、湿地の埋め立て等。